

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 昭和36年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0000001189">https://doi.org/10.15084/0000001189</a>

昭和 36 年度  
国立国語研究所年報

—13—

国立国語研究所

1962

## 刊行のことば

昭和36年度は国立国語研究所が創立されてから十四年になる。この年度内に行なった調査研究の概略をまとめたのが本書である。

一ツ橋の庁舎が手狭になったので、かねがね新しい候補の建物を探していたが、北区稲付西山町の兵器補給廠あとの建物がいよいよ本ぎまりになり、昭和37年3月31日に移転した。37年度からの研究は、この新しい場所で行なわれる。

なお、36年度内に刊行した書物は次の通りである。

現代雑誌九十種の用語用字（報告21）

昭和37年10月

国立国語研究所長 岩淵悦太郎

# 目 次

## 刊行のことば

昭和36年度の調査研究のあらまし .....	1
話しことばの調査研究	
話しことばの文型の調査研究 .....	3
書きことばの調査研究	
現代雑誌一般の用語・用字の概観調査 .....	7
地域社会の言語生活の調査研究	
日本語地図作成のための調査 .....	14
国語教育に関する調査研究	
中学校生徒の言語能力の発達に関する研究 .....	26
言語の効果に関する調査研究	
国語文章の横組みのための印刷条件の研究 .....	29
国語の歴史的発達に関する調査研究	
明治時代語の調査研究 .....	33
古辞書の索引作成 .....	49
特殊問題の調査研究	
類義語の調査研究 .....	54
国語関係文献の調査 .....	59
図書の収集と整理 .....	65
庶務報告 .....	74

## 昭和36年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次の通りである。

- |                                 |             |
|---------------------------------|-------------|
| (1) 話しことばの文型の調査研究（継続）           | 話しことば研究室    |
| (2) 現代雑誌一般の用語・用字の概観調査(継続)       | 書きことば研究室    |
| (3) 日本言語地図作成のための調査（継続）          | 地方言語研究室     |
| (4) 中学校生徒の言語能力の発達に関する研究         | 国語教育研究室     |
| (5) 国語文章の横組みのための印刷条件の研究<br>（継続） | 言語効果研究室     |
| (6) 明治時代語の調査研究（継続）              | 近代語研究室      |
| (7) 古辞書の索引作成                    | 古代語研究室開設準備室 |
| (8) 類義語の調査研究                    | 第一資料研究室     |
| (9) 国語関係文献の調査（継続）               | 第三資料研究室     |

「話しことばの文型の調査研究」は前年度にひきつづき、講演・講義・演説などの独話資料による研究を進めた。文型の調査という立場からのイントネーションや構文の研究方法については未開発の問題がかなりあるが、それについても検討を加えた。

「現代雑誌一般の用語・用字の概観調査」は昭和31年度以来、現代雑誌九十種について、その用語・用字の調査を行なっている。その一部がまとまったので、総記および語彙表を「現代雑誌九十種の用語用字」の第一分冊として刊行した。

「日本言語地図作成のための調査」は昭和32年度以来7カ年計画で全国約2千地点の調査を行なう予定である。本年度は第五年度で354地点の調査を完了し、通算1,665地点となった。

「中学校生徒の言語能力の発達に関する研究」は、前年度までで小学校児童についての追跡的調査を完了したので、本年後から中学校生徒について言語能力の発達の調査を実施することにし、その準備として、中学生の言語能力の問題点をとらえ、調査方法を考案するための調査を行なった。

「国語文章の横組みのための印刷条件の研究」は国語の文章を横組みにした

場合、読了速度や理解度に字形の違いがどのように影響するかを明らかにしようとした。よこ長・正方形・たて長の3種の活字で同一文章を印刷し、約900人の中高校生について種々の調査を行なった。

「明治時代語の調査研究」は従来、明治初期の新聞・学術文献その他について用語の調査を行なって来たが、本年度から、用語と文体との関係を明かにするため、それらの資料を整理して、約45,000語について、くわしい記述をすることにした。

「古辞書の索引作成」は古代語研究室開設準備室が本年度新しく始めたものである。まず、「色葉字類抄」の五十音順索引を作成している。

「類義語の調査研究」も本年度から新しく始めた研究項目である。どのような類義語が現代の生活で存在し、コミュニケーションにおいて、類義語がどのような障害を起こしているかを追究し、合わせて、その処理方法を考察しようとするものである。

本年度当初の研究組織は次の通り。

第一 研究部	(部長) 林 大				
	話しことば研究室 (室長)大石初太郎	宮地 裕	南不二男	鈴木重幸	
	書きことば研究室 (室長)見坊 豪紀	齋賀秀夫	水谷静夫	石綿敏雄	
	地方言語研究室 (室長)柴田 武	宮島達夫 野元菊雄	上村幸雄	徳川宗賢	
第二 研究部	(部長) 興 水 実				
	国語教育研究室 (室長)芦沢 節	村石昭三	吉沢典男		
	言語効果研究室 (室長)永野 賢	高橋太郎	渡辺友左		
第三 研究部	(部長) 山 田 巖				
	近代語研究室 (室長)林 四郎	進藤咲子			
	古代語研究室 (主任)山田 巖	広浜文雄			
第四 研究部	(部長) 岩淵悦太郎(兼任)				
	第一資料研究室 (室長)松尾 拾	西尾寅弥	田中章夫		
	第二資料研究室 (室長)飯豊 毅一	高田正治			
	第三資料研究室 (室長)村尾 力	大久保愛			

なお、第三資料研究室長の村尾力は9月20日に死去したので、齋賀秀夫が12月1日付で第三資料研究室長となった。

# 話しことばの文型の調査研究

## A. 前年度までの経過

話しことばの文型研究を、われわれは、まず各種の対話資料によって始めた。(対話資料とは、対話、すなわち、話し手・聞き手の立場をたがいに交換することばのやりとりにおける発話の記録——録音および文字化——である。最初に対話資料を選んだのは、話しことばの特徴的な構造を多く反映すると予想される対話資料によって、本質的なものに早く迫ろうとしたからである。)その結果を記述して、報告書「話しことばの文型(1)——対話資料による研究——」を、昭和35年3月に刊行した。ここでは、文の認定の基準の設定、文の要素と考えた表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの分析・整理、表現意図・構文・イントネーションのからみ合いとしての総合的文型の小規模の試みなどを行なった。われわれの文型研究における基礎的段階であり、調査研究をさらに継続発展させることを予定した中間段階の報告であった。

ひきつづき、昭和35年度から、独話資料による文型研究にとりかかった。(独話資料とは、独話、すなわち、ひとりの話し手が、多くのばあい、多数の聞き手に向かってする話における発話の記録である。)独話資料による研究において、先行の対話資料による研究の方法を修正発展させて話しことばの文型にさらに迫ると同時に、一つの試みとしての文型表作成に及ぼうとしたものである。

## B. 担 当 者

下記の話しことば研究室員の共同研究であるが、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれについては、付記するような分担により、随時、共同討議にかけて作業を進めた。(室員の一部異動があったため、前年度と分担を変更するところがあった。)

大石初太郎 宮地 裕(表現意図・イントネーション)

南 不二男（構文） 鈴木重幸（構文）

なお、研究補助員、泉 喜与子・吉村香苗が作業を助けた。

### C. 本年度の作業

前年度にひきつづき、独話資料による研究を進めた。

#### 1 方法に関して

対話資料による研究の段階に比べて、方法を修正するところがいくつかあったが、そのうちのおもな点につき、説明をはぶいて要をしるす。

1.1 イントネーションを、あらためて次のように整理した。

- (A) 意図表現音調    ↗↘であらわす。
- (B) 卓立表現音調    ∧∨であらわす。
- (C) 装飾表現音調    （符号であらわしにくい。）

意図表現音調とは、文の表現意図に参加する音調で、主として文末述語にあられる。

例    カエル↗    （帰る？）  
      カエルヨ↘    （帰るよ。）

卓立表現音調とは、文の部分部分の卓立表現に参加する音調である。卓立表現とは、文節あるいは語に対して何らかの強調的な意味を加えようとする言語主体の気持ちの表現をいう。

例    ボクワ    カエル↘    (ボクワ)  
      ボクワ    カエル↘    (ボクワ)

装飾表現音調とは、発話の装飾表現に参加する音調である。装飾表現とは、発話における言語主体の飾り立ての気持ちの表現をいう。いわゆるメロディーはそのもっとも顕著なものであり、そのほか、勅語捧読のばあいの型にはまったふし、スポーツの実況放送でのアナウンサーのこたばの上のふしなどが、そのいちじるしいものである。

以上のうち、装飾表現音調はおそらく文型にあずからないものであり、卓立表現音調は文の構造に関係するところがあって、文型のとらえかたの規模のもちようによっては、これにあずかるところがあると考えられるが、意図表現音



調は、文型への関与がもっとも容易に考えられるものであろう。(イントネーションの文型への関与のしかたという本質問題については、さらに吟味を要するところがある。)

1.2 構文の扱いに関して、次のようにきめた。

1.2.1 単純文と複合文とに分ける。

複合文とは、いいきりの述語にかかる連用的な述語(連用形および接続助詞をともなったもの)をもった従属句を含む文、単純文とは、それを含まない文とする。

1.2.2 単純文の取扱いを、次のようにする。

1.2.2.1 成分に関して、次のように扱う。

述語およびそれにかかる連用的な成分(主語、広い意味の連用修飾語など)、独立語を第1次成分とし、それだけを扱う。連体修飾語、並立関係に立つ成分や述語以外の成分にかかる連用的な成分は、第1次成分とは見ない。

第1次成分を、次のように分ける。

述 語

主 語

目的語——広い意味の連用修飾語のうち、述語の表わすことがら(主として動作・状態)の完成に参加するものごとを表わす成分。～ヲ、～ニ、～ヘ、～ト、～カラ、～マデの関係で述語にかかる体言的な成分。

補語——(1)変化(ナル、スル、……)の結果の状態を表わす成分。(2)言語活動(イウ、ナヅケル、……)・知覚活動(カンジル、ミエル、……)・思考活動(オモウ、カンガエル、ミナス、……)などの精神活動の内容を表わす成分。

狭い意味の連用修飾語——述語の表わすことがらの属性(質・ようす・量・程度など)を表わす成分。

状況語——述語あるいは上記の諸成分と述語との組合せの表わすことがらをとりまく状況(場所・時間・手段・原因・理由・目的など)を表わす成分。

遊離的な成分——陳述副詞・接続詞・よびかけなどの成分。

### 1.2.2.2 骨組み文と拡大文とを区別する。

成分を下記のような骨組み成分と拡大成分とに分け、骨組み成分あるいはその組合せによる文の骨組みだけから成る文を骨組み文といい、骨組みを拡大成分によって拡大した文を拡大文という。

#### 骨組み成分

主語・述語——場面・文脈などの助けを借りないばあい、述語文として  
は必須の成分。

目的語・補語——場面・文脈などの助けを借りないばあい、述語の性格  
によっては必須の成分。

#### 拡大成分

連用修飾語 状況語 遊離的な成分

## 2 資料に関して

資料は前年度から扱っているものを中心とするが、さらに補充資料として、次のものを加えた。

(リールNo.)	(内 容)	(時間)
128	コーヒーの話(説明)	1 時間 1 分 4 秒
129	テーブルスピーチ(5人)	35・41
130	高校授業・保健	49・22
131	高校授業・東洋史	1・5・46
132	高校授業・家庭科	1・5・47
133	ラジオ・文化講演会 1	58・55
134	ラジオ・文化講演会 2	57・38
135	ラジオ・解説(3人)	35・53
136	ラジオ・雑2種(4人)	20・25
137	テレビ・心と人生(談話, 3人)	44・22
138	テレビ・雑2種(講義, 8人)	44・40
139	テレビ・ニュース解説(4人)	57・51
140	テレビ・ニュース解説	14・23

## D. 今後の予定

独話資料による研究を次年度においてまとめ、同時に、それにもとづいて、試案としての文型表を作成する予定である。(大石)

## 現代雑誌一般の用語・用字の概観調査

### A. これまでの研究経過

昭和31年度以後、現代雑誌一般の用語用字の概観調査を行ない、本年度はその成果の一部を『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊総記および語彙表（国立国語研究所報告21，昭和37年3月）で報告した（その概要はpp. 11～12，E項にしるしてある）。

計量的調査では、調査目的に即応した統計理論の整備の必要はもちろんであるが、そのほかに、大量のカードを等質的に作成・操作するための、調査単位（単位語）の認定のしかた、カード採集・集計整理などの作業方式の決定、作業の手順、作業の品質管理などに関する周到な計画と実施が大切である。

現在調査中のものも含め、われわれはこれまで三回にわたる大規模な用語・用字の調査を経験し、方法的にも実践的にも多くの成果をあげたと信ずる。

方法的には、層化集落抽出法の一変形による語彙調査の理論と方法を確立し（⇒報告13，pp. 97～108；⇒報告21，pp. 295～320）、標本から調査対象全体の語彙量を推定する公式を求め（⇒年報6，pp. 52～59；⇒報告13，pp. 26～37）、また、同音の別語が同じ語の意味の違いかを操作的に判別する公式を作り（⇒報告13，pp. 108～115）、さらに、ある語がよく使われる語であるかどうかを論ずるには、なまの使用度数から、相対尺度である使用率を計算し、かつ、調査対象全体での使用率の推定精度をも考慮すべきであることを明らかにした（⇒報告12，p. 5）。一方、実践的成果としては、五十音順・使用率順の各種語彙表、意味による分類語彙表、各種漢字表、語の表記の一覧表など、国民の言語生活の実態を反映する資料を蓄積してきた。

以下に、書きことば研究室がこれまでに行なってきた用語・用字調査の規模その他をまとめて示せば次の通りである。

## 用語調査

資料	調査対象	抽出比	標本延べ語数	標本異なり語数	母集団の推定延べ語数	発表
1	婦人雑誌 主婦之友 <sup>*</sup> (25年1月～12月) (本文全体)	約1/6	14.6万	2.7万	90万	報告4
2	総合雑誌 13種(28年7月～29年6月) (本文全体)	約1/40	23万	2.3万	900万	報告12～13
3	現代雑誌一般 5部門90種 (本文全体) (31年1月～12月)	約1/230	53万	4.0万	1億4千万	報告21 (以下続刊)

\*別に、実用記事だけについて婦人生活(25年1月～12月)を同じ抽出比で調査した。標本延べ語数は5.2万、同異なり語数は1.0万、実用記事全体の推定延べ語数は33万である。参照、報告4。

## 用字調査

資料	調査対象	抽出比	標本延べ字数	標本異なり字数	現われなかった当用漢字数	発表
4	婦人雑誌 1に同じ*	全標本	17.0万	3048	41	報告4
5	総合雑誌 2に同じ	全標本の1/2	11.7万	2781	73	報告19
6	現代雑誌一般 3に同じ	全標本の2/3	28.0万	3328	15	報告22 (近刊)

\*婦人生活の実用記事の場合は、標本延べ字数6.0万、同異なり字数2,000字である(追記参照)。

参考 婦人雑誌の調査の前に、朝日新聞の昭和25年6月分に対し全数調査を行ない、延べ24万、異なり1.5万(人名・地名を含まない)の語数を得た(⇒資料集2『語彙調査——新聞用語の一例——』(昭和27年3月))。

追記 『婦人雑誌の用語』(報告4) p.323, 「§9.2 標本に現われた漢字の種類」の数字を次のように訂正する。

	主 婦 之 友 全 体	実用記事	婦 人 生 活 実 用 記 事
延 べ 字 数	169,590	67,798	59,993
異 な り 字 数	3,048	2,154	2,000
その雑誌に だけ使われ た字数	実用 全体	445 -	291 88

## B. 調査の輪郭

目標 現代書きことば資料のうち雑誌という形態をとる刊行物について、多くの部門にわたり、その用語の概観を標本調査法によって計量的に試み、基本語彙設定のための基礎資料を得ようとする。

ここに現代雑誌一般とは、総合雑誌、婦人雑誌などのような特定の部門にか

たよらず、ひろく各分野にわたり選定された成人用の雑誌（季刊，月刊，旬刊，週刊）をさす。ただし学術・技術・専門雑誌の類を含まない。

調査対象 昭和31年度刊行の雑誌，5部門90種（1月～12月号）の本文全体(付録・増刊号を含む)。

部門の分け方と各部門の雑誌の種類は次の通り（調査した誌名の一覧はp. 13に示してある）。

I 評論・芸文（世界・中央公論・新潮・群像等）	12種
II 庶民（文芸春秋・家の光・週刊朝日等）	14種
III 実用・通俗科学（ダイヤモンド・科学朝日・時の法令等）	15種
IV 生活・婦人（主婦の友・装苑・暮しの手帖等）	14種
V 娯楽・趣味（オール読物・読切小説集・映画の友・野球界等）	35種

調査対象の大きさ

延べページ数	226,358ページ
推定延べ語数	約 1.4億（β 単位による）
内訳	{ 下記以外の語 約8,400万語 助詞・助動詞 約5,600万語

抽出比 1/230

標本の大きさ

- (1) 助詞・助動詞以外の語……広告を除いた全紙面から 1/8 ページ大の部分8,000箇所。ページに換算して1,000ページ分。
- (2) 助詞・助動詞……(1)の1/3。
- (3) 表記・漢字……(1)の2/3。

標本延べ語数 約53万（総合雑誌の語彙調査で用いた規準（β 単位）によって数えた語数）。おおよその内訳は次の通り。

区分	助詞・助動詞以外		助詞・助動詞		合計	漢字調査の部			
	延べ	異なり	延べ	異なり		延べ	異なり	延べ	異なり
前段	14.5万	2.3万	9.5万	150	24.0万	2.3万	13.8万	2.943	
中段まで	29.2	3.4	-	-	38.7	3.4	28.0	3.328	
後段まで	43.8	4.0	-	-	53.3	4.0	-	-	

作業の段階 各部門とも 9 段階に分け，3 段階ごとに集計する。

### C. 前年度までの経過

資料用雑誌の決定とその収集,採集箇所の抽出,採集用カードのリプリント,全段階のカード採集・検査・整理・集計。

助詞・助動詞調査用のカードの採集・検査・整理・集計,記述法の研究。

表記調査用のカードの採集・整理。漢字調査用のカードの採集・検査・整理・集計。

### D. 本年度の作業の概要

採集カードの最終集計を行ない,延べ語数,異なり語数を確定した。

各語について使用率を算定し,使用率の高い語については推定精度を計算した。

標本使用度数7すなわち使用率.016パーミル以上の語7,200の整理票をぬきだして,全体および各層ごとの使用率順語彙表,および上記7,200語の五十音順語彙表を作成した。

標本使用度数5すなわち使用率.011パーミル以上の語を,意味によって分類された類義語集の中に位置づける作業を行なった。

報告書第一分冊の原稿を作成し,これを印刷した。(→E項参照)。

結合した語形の表を作成するために,結合した語形の調査を始めた。今回の調査では,たとえば「運動会」は,「運動」と「会」とに切って採集したので,結合した語形「運動会」も検索できるための表を作ることにしたのである。

同語別語判別のための実例集を整理した。

助詞・助動詞については,採集カードの延べ語数および異なり語数を確定し,各語についてその使用率および推定精度を計算した。さらに,各語についての用法の分類と記述に着手した。

漢字については,次の作業を行なった。

- (1) 漢字採集カード(中段の分)の部首順排列ならびに集計。
- (2) 漢字採集カードの前・中段合併ならびに集計。

- (3) 漢字集計カードの作成。
- (4) 部首順漢字度数表の作成。
- (5) 度数順漢字表の作成。
- (6) 度数分布表の作成。
- (7) 用法別漢字表の作成（音訓別、語別、層別の一覧表。この一覧表は漢字を使用度数順に並べたものと、部首順に並べたものとの二種類を作成した。なお、語ごとに、その漢字を使わない他の表記の種類と度数も記載した。）
- (8) 使用率順漢字表の作成（標本度数 9 以上の漢字約 2,000字について、全体および層別の使用率を計算した。）
- (9) 五十音順漢字表の作成（報告書の索引用として）。

## E. 報告書の内容

本年度は総記および語彙表を『現代雑誌九十種の用語用字』の第一分冊（国立国語研究所報告21）として印刷した。その内容は下記の通りである。

**総記** この調査全体の輪郭，報告書の構成，方法（作業手順，調査単位の切り方，集計単位の定め方）について説明した（pp. 1～20）。

**語彙表** はじめに語彙表の性格，体裁，引き方についての解説を付けた（pp. 21～35）。

語彙表には，標本使用度数 7 以上の語 7,200 を取めた。

表の種類は次の通り。

**五十音順語彙表**（第 1 表）助詞・助動詞以外の語全体を五十音順に排列した語彙表。

各語について全体および第一層～第五層の使用率を示した。なお，使用率順語彙表に示した精度計算の索引，および報告書第三分冊に載せる予定の，意味による分類語彙表の索引番号を付記した。

**使用率順語彙表**（第 2 表～第 7 表）使用率順に排列した，全体および各層の語彙表。使用率と共に順位を示した。なお標本使用度数が次の水準を越えた語については，使用率の 95 パーセントの信頼区間およびその推定精度をも示し

た。

標本使用度数が全体で	50
第一層で	20
第二層～第五層で	30

助詞・助動詞の五十音順語彙表（第8表） 全体および第一層～第五層における使用率，その95パーセントの信頼区間，推定精度，使用率，順位（全体および各層での）を示した。

付録 この調査の標本抽出法の理論と手続き，使用率推定法について説明した（pp. 295～320）。

調査のデータ概略 この調査の規模・対象などを概観できる数字をおさめた（p. 321）。なお「概略」の部分には，次の二つの数字を示した。

助詞・助動詞とそれ以外の語との，延べ語数の比率は，4：6

標本度数7以上の語数と，それが延べ語数中で占める割合は，

助詞・助動詞 99 99.8%（全異なり語数 150）

それ以外の語 7,200 86 %（全異なり語数 4.0万）

## F . 担 当 者

担当者は

見坊豪紀 水谷静夫 石綿敏雄 宮島達夫

である。なお，第三資料研究室の斎賀秀夫，松本昭が漢字調査の仕事を分担し，第一研究部長の林大が意味による分類語彙表関係の仕事を分担した。また補助者として，研究補助員橋本圭子，高木翠，鈴木百合子，小林さち子，植田房子，池田稔子が作業に従事した。

## G. 来年度の予定

昭和31年度から6か年にわたったこの調査も，きたる37年度には完了する予定である。37年度にはこの調査の全部の作業を完了し，その成果を，上記第一分冊に続けて，次のような報告にまとめる。

1 各種漢字表（報告22として近刊）



- (1) 使用度数分布表
  - (2) 教育漢字, 教育外当用漢字, 表外漢字の比率
  - (3) 使用率順漢字表(標本度数 9 以上の 1,995字)
  - (4) 用法別漢字表(同上)
  - (5) 五十音順漢字表(全漢字 3,328)
- 2 下記の各種の表
- (1) 結合した語形の表
  - (2) 意味による分類語彙表
  - (3) 同語別語判別のための語例集
- 3 分析
- (1) 助詞・助動詞の意味・用法・接続などの記述・分析
  - (2) 語彙の量的構造を中心とした統計解析
  - (3) 表記および漢字の用法の分析
  - (4) 語彙の質的構造を中心とした分析
- 使用率と語種, 使用率と品詞などの相関, その他

付 調査した雑誌名一覧

I 評論・芸文 12種

群像 芸術新潮 新潮 世界 大法輪 短歌 中央公論 俳句  
美術手帖 文芸 別冊文芸春秋 みづゑ

II 庶民 14種

葦 家の光 キング サンデー毎日 週刊朝日 週刊サンケイ 週刊  
読売 人生手帖 特集人物往来 知性 日本週報 文芸春秋 丸  
リーダーズダイジェスト

III 実用・通俗科学 15種

エコノミスト 科学朝日 科学読売 自然 実業之日本 ジュリスト  
商店界 ダイヤモンド 東洋経済新報 時の法令 農業朝日 農業世界  
農耕と園芸 保健同人 ポピュラーサイエンス

IV 生活・婦人 14種

暮しの手帖 主婦と生活 主婦の友 スタイル 装苑 それいゆ  
ドレスメーカー 婦人朝日 婦人画報 婦人倶楽部 婦人公論  
婦人生活 婦人之友 若い女性

V 娯楽・趣味 35種

アサヒカメラ 囲碁 映画の友 映画ファン オール読物 面白倶楽部  
音楽の友 棋道 近代映画 月刊ファイト 傑作倶楽部 講談倶楽部  
娯楽よみうり 実話雑誌 週刊新潮 週刊東京 小説倶楽部 小説サロン  
小説春秋 小説新潮(別冊小説新潮を含む) 小説と読物 小説の泉  
スクリーン 相撲 旅 トルーストーリー 文芸春秋漫画読本 平凡  
ベースボールマガジン 宝石 明星 野球界 読切倶楽部 読切小説集  
笑の泉 (見坊)

# 日本語地図作成のための調査(第5年度)

## A. あらまし

北海道から沖縄まで、日本語地域の全域を範囲として、語の地理的分布を明らかにし、日本語の歴史を再構することを目的として始めたこの調査は、今度、7か年計画の第5年度を終えた。調査項目を一定にして毎年調査地点をふやしていくという方法をとって、今年度は354地点を加えることができた。前期5か年の計画が終了し、調査地点の網の目はかなり細かくなった。初年度からの調査地点数は、合計1,665となる。

## B. 担当者

昨年度と同じように、地方言語研究室が調査センターとなって調査全般の企画・運営および結果の整理に当たった。臨地調査は主として地方研究員が地域を分担して行なったが、地方言語研究室の室員4名も随時これに加わった。

昭和36年度の臨地調査を分担した人々は、次のとおり。

調査者番号	担当地域	氏名	勤務先(1962年6月現在)	住所(左に同じ)
01	北海道Ⅰ	五十嵐三郎	北海道大学文学部(助教授)	札幌市月寒西3条5丁目
02	北海道Ⅱ	長谷川清喜	北海道学芸大学札幌分校(助教授)	札幌市北23条西7丁目
03	北海道Ⅲ	石垣 福雄	札幌市教育委員会(指導主事)	札幌市北2条西12丁目
04	青森	此島 正年	弘前大学教育学部(教授)	弘前市袋町20
05	岩手	小松代融一	県立杜陵高校(教頭)	盛岡市下小路63
48	宮城	加藤 正信	東北大学文学部(助手)	仙台市南小泉伊藤屋敷48
07	秋田	北条 忠雄	秋田大学学芸学部(教授)	秋田市手形東新町1
08	山形	後藤 利雄	山形大学文理学部(講師)	山形市緑町2丁目4の4
54	福島	三浦 芳夫	県立田村高校(教諭)	福島県田村郡三春町大町51
55	茨城	金沢 直人	茨城大学教育学部(助教授)	水戸市石川町4043の2
11	栃木	多々良鎮男	宇都宮大学学芸学部(助教授)	宇都宮市一ノ沢町1の61
12	群馬	上野 勇	県立沼田女子高校(教諭)	沼田市810
52	埼玉	江原 襄	川越市立城南中学校(教諭)	川越市南通町9の17

57	千葉	後藤 和彦	東京都立大学大学院（学生）	横浜市港北区大曽根町460
58	東京	馬瀬 良雄	長野県短期大学（講師）	長野市淀ヶ橋町柳町アパートB14の1
49	神奈川	日野 資純	静岡大学文理学部(助教授)	静岡市大岩町2の82静岡大学大岩宿舍
16	新潟	劔持隼一郎	県立柏崎高校（教諭）	柏崎市柏木町194
17	富山・石川	岩井 隆盛	金沢大学教育学部（助教授）	石川県河北郡津幡町字清水ホ313
18	福井	佐藤 茂	福井大学（教授）	福井市湊新町66
19	山梨	清水 茂夫	山梨大学学芸学部（助教授）	山梨県中巨摩郡白根町百々3062
20	長野	青木千代吉	長野市立三陽中学校（教諭）	長野県更級郡更北村中氷鉤1089
21	岐阜	谷開 石雄	県立岐阜商業高校（教諭）	岐阜市且の島204
22	静岡	望月 誼三	静岡大学教育学部（教授）	静岡市北安東628
23	愛知	山田 達也	日本福祉大学（助教授）	名古屋市中村区大秋町3の26
56	三重	慶谷 寿信	名古屋大学大学院（学生）	名古屋市北区若園町2の50今村方
50	滋賀	寛 大城	県立虎姫高校（教諭）	長浜市分木町1260佐脇方
25	京都	奥村 三雄	岐阜大学学芸学部（助教授）	岐阜市長良六本松岐大六本松宿舍
26	大阪	前田 勇	大阪学芸大学（教授）	大阪市東住吉区田辺西6の34
28	兵庫	岡田荘之輔	温泉町立温泉小学校(校長)・同幼稚園(園長)	兵庫県美方郡温泉町湯
29	奈良	西宮 一民	皇学館大学（教授）	枚岡市河内町920
30	和歌山	村内 英一	和歌山大学学芸学部(助教授)	和歌山市片岡町1の1
31	鳥取	広戸 惇	島根大学文理学部（教授）	出雲市元宮町
32	島根	岡 義重		島根県簸川郡斐川村大字富村
33	岡山	虫明吉治郎	県立岡山操山高校（教諭）	岡山市高島新屋敷354
34	広島	村岡 浅夫	吉和村立吉和中学校（校長）	広島県佐伯郡五日市町屋代121
35	山口	阿波 陽	県立大津高校（教諭）	山口県大津郡日置村古市
36	徳島	宮城 文雄	徳島大学学芸学部（助教授）	徳島県那賀郡那賀川町島尻931の2

37	香川	近石 泰秋	香川大学学芸学部（教授）	高松市九番丁公務員宿舎 41
38	愛媛	杉山 正世	新田高校（教諭）	今治市河南町2区267
39	高知	土居 重俊	高知大学教育学部（助教授）	高知市弥生町44
40	福岡	都築 頼助	福岡学芸大学福岡分校（教授）	福岡市高宮玉川町93
41	佐賀・長崎	小野志真男	佐賀大学教育学部（教授）	佐賀市赤松町中館93
43	熊本	秋山 正次	熊本大学教育学部（助教授）	熊本市若葉町36
44	大分	糸井 寛一	大分大学学芸学部（助教授）	臼杵市海添190
45	宮崎	岩本 実	宮崎大学学芸学部（助教授）	宮崎市下水流町190の1
46	鹿児島	上村 孝二	鹿児島大学文学部（教授）	鹿児島市武町965
51	沖縄	仲宗根政善	琉球大学（教授）	那覇市字大道262 以上地方研究員47名
99		柴田 武（室長）		
98		野元 菊雄		
97		上村 幸雄		
96		徳川 宗賢		以上研究室員4名

なお、言語地図の記入については、言語地理学の専門家 W. A. グロータース神父の協力を受け、また作業一般に研究補助員白沢宏枝が参加した。

### C. 調査項目

調査の詳細については、すでに年報9～11で説明したからくり返さない。ただ、本年度も昨年度と同じく、調査項目について一部改訂を行なったので、その点についてだけ説明する。

第1年度から第3年度に至る 975地点での調査は、第1調査票・第2調査票と称する2分冊、230項目（主として単語）の調査票を使ってきた。ところが、第3年度の調査の終わった段階で、各項目の分布図を検討した結果、もうこれ以上調査する必要のないと思われる項目が11項目あった。

そこで、これらの調査については、第3年度で打ち切ることにし、残った4か年にさらに新しい項目を加えて、少しでも成果を豊かにしようと考えた。第4年度（昨年度）のためには、27項目の第3調査票を作り、すでに調査した。<sup>1)</sup>今年度（第5年度）は、この第3調査票はいちおう調査を中止し、別に28項目

1) 年報12参照。

の第4調査票を作った。つまり、第4年度に使用した調査票は、第1・第2・第3調査票、計246項目であり、第5年度に使用した調査票は、第1・第2・第4調査票、計247項目である。<sup>1)</sup> 第3・第4調査票は、それぞれ一年間の調査によって結果の見通しがつくので、さらに項目を精選して、第6年度以降の後期計画の調査項目に加えられる予定である。

以下、第4調査票28項目を列挙する。ただし、調査票の実際の質問文そのままではない。28項目を分類すると、次のようになる。①いままで調べた項目の分布を解釈するために役立つもの、②東京(標準)語の位置を明らかにするために役立つもの、③国語問題としてとりあげられているもの、④重要な音声的特徴の分布を明らかにするためのもの。

- 1 「ひげ(鬚)」を何と言うか (<ヒ>について)。
- 2 「あせ(汗)」を何と言うか (<セ>について)。
- 3 「せなか(背中)」を何と言うか (<セ>について)。
- 4 「(赤ん坊を) おんぶする」を何と言うか。
- 5 「(両肩でふろしき包みを) 背負う」を何と言うか。
- 6 「(片方の肩でふろしき包みを) かつぐ」を何と言うか。
- 7 「(材木を) かつぐ」を何と言うか。
- 8 「(てんびん棒を) かつぐ」を何と言うか。
- 9 「(ふたりで) かつぐ」を何と言うか。
- 10 「ふとる(肥える)」を何と言うか。
- 11 人が「イル」と言うか、「オル」と言うか、「アル」と言うか。
- 12 「ない(無い)」を何と言うか。
- 13 「いい天気だ」を何と言うか。
- 14 「けむり(煙)」を何と言うか。
- 15 「風」を何と言うか (<ゼ>について)。
- 16 「東」を何と言うか (<ヒ>について)。
- 17 「正月」を何と言うか (<グッ>について)。
- 18 「元日」を何と言うか (<グッ>について)。
- 19 「七月」を何と言うか (<ッ>について)。
- 20 「火事」を何と言うか (<ク>について)。
- 21 「税金」を何と言うか (<ゼ>について)。
- 22 「かげ(蔭)」を何と言うか (ガ行子音について)。
- 23 「鏡」を何と言うか (ガ行子音について)。
- 24 「すいか(西瓜)」を何と言うか (<ク>について)。
- 25 「なす(茄子)」を何と言うか。

---

1) 調査員によつては、さらに第3調査票を加えて、計274項目を調査した場合もある。

- 26 「四角い」と言うか。「四角な」と言うか。「四角の」と言うか。  
 27 「とんぼ(蜻蛉)」を何と言うか。  
 28 「やんまとんぼ」を何と言うか。

## D. 進 行 状 況

### 1. 調査地点

昭和36年度に調査した354地点<sup>1)</sup>は、次のとおり。なお、調査者を番号で示した。

調査地点	調査者番号	調査地点	調査者番号
北海道		三戸郡田子町大字夏坂字夏坂 <sup>4</sup>	04
芦別市野花南町金剛 <sup>4</sup>	02	三戸郡新郷村大字戸来字金ヶ沢 <sup>4</sup>	04
芦別市野花南町 960番地 <sup>4</sup>	02	岩手県	
浜益郡浜益村字茂生 <sup>34</sup>	01	盛岡市三ッ割字田畑 <sup>34</sup>	05
松前郡松前町字江良 <sup>4</sup>	03	胆沢郡前沢町古城 <sup>34</sup>	05
亀田郡綴法華村字浜町 <sup>4</sup>	03	岩手郡牽石町上町 <sup>34</sup>	05
奥尻郡奥尻村字青苗 <sup>4</sup>	03	岩手郡牽石町字鷹宿 <sup>34</sup>	05
積丹郡積丹町字入舩 <sup>4</sup>	03	和賀郡和賀町横川目荒屋 <sup>34</sup>	98
天塩郡天塩町新栄通り1丁目 <sup>4</sup>	02	宮城県	
天塩郡幌延町字幌延2条1丁目 <sup>4</sup>	02	仙台市中心部市街地(琵琶首丁) <sup>34</sup>	48
紋別郡遠軽町向遠軽 <sup>3</sup>	02	角田市角田字町 <sup>3</sup>	97
湧払郡穂別村字穂別 <sup>34</sup>	01	柴田郡川崎町川崎 <sup>34</sup>	48
青森県		宮城郡七ヶ浜町松ヶ浜 <sup>34</sup>	48
東津軽郡蟹田町大字小国字山崎 <sup>4</sup>	04	黒川郡大郷村貝殻塚 <sup>34</sup>	48
西津軽郡鮭ヶ沢町大字本町 <sup>4</sup>	04	玉造郡岩出山町字下河原 <sup>4</sup>	97
西津軽郡深浦町大字麴木字亀ヶ崎 <sup>4</sup>	04	桃生郡河北町飯野川 <sup>34</sup>	48
西津軽郡深浦町大字田野沢字汐干浜 <sup>4</sup>	04	桃生郡雄勝町船越 <sup>34</sup>	48
上北郡十和田町大字百目木 <sup>4</sup>	04	牡鹿郡牡鹿町鮎川 <sup>34</sup>	48
上北郡六ヶ所村大字泊字村内 <sup>4</sup>	04	秋田県	
上北郡六ヶ所村大字平沼字二階坂 <sup>4</sup>	04	北秋田郡花矢町長走 <sup>4</sup>	07
三戸郡田子町大字田子字田子 <sup>4</sup>	04	北秋田郡比内町大葛 <sup>4</sup>	07

1) 本年度の調査として報告されたものの中に、調査者の都合から昭和34年度以前に調査された結果が含まれている。これらの地点では、改訂前の第1・第2調査票のみが使われた。また、新第1・第2調査票に第3調査票および第4調査票を加えて調査した結果もかなりある。これらを区別するために、地点名の肩に次のような記号をつけた。

旧第1・第2調査票を使った地点……記号なし(第1～第3年度と同じという意味で)——2地点

旧第1・第2調査票と第3・第4調査票とを使った地点……(34)——3地点

新第1・第2調査票と第3調査票とを使った地点……3——9地点

新第1・第2調査票と第4調査票とを使った地点……4——197地点

新第1・第2調査票と第3・第4調査票とを使った地点……34——145地点

北秋田郡森吉町桂瀬 <sup>4</sup>	07	鹿島郡旭村大字下大田字大谷川 <sup>34</sup>	55
山本郡八森町岩館 <sup>4</sup>	07	鹿島郡大野村榎木 <sup>34</sup>	55
山本郡二ツ井町梅内 <sup>4</sup>	07	<b>栃木県</b>	
山本郡藤里村藤琴 <sup>4</sup>	07	足利市月谷町 <sup>4</sup>	12
由利郡東由利村館合字家ノ下 <sup>4</sup>	07	芳賀郡二宮町久下田 <sup>34</sup>	11
仙北郡南外村松木田 <sup>4</sup>	07	塩谷郡塩原町大字下塩原小字門前 <sup>34</sup>	11
仙北郡千畑村中野 <sup>4</sup>	07	塩谷郡栗山村大字日向小字戸中 <sup>34</sup>	11
平鹿郡増田町増田 <sup>4</sup>	07	<b>群馬県</b>	
<b>山形県</b>		甘楽郡下仁田町本宿 <sup>4</sup>	12
米沢市大字大沢 <sup>34</sup>	98	甘楽郡南牧村羽沢字羽根沢 <sup>4</sup>	12
村山市大字楯岡 <sup>3</sup>	98	吾妻郡草津町大字草津 <sup>34</sup>	96
東置賜郡川西町大字下奥田字荒窪 <sup>4</sup>	08	<b>埼玉県</b>	
西置賜郡小国町大字津川字沼沢 <sup>4</sup>	08	川口市十二月田町 <sup>4</sup>	58
西置賜郡飯豊町大字下屋地 <sup>4</sup>	08	狭山市入間川 <sup>34</sup>	52
東田川郡三川村神花 <sup>3</sup>	99	秩父郡横瀬村芦ヶ久保 <sup>34</sup>	99
最上郡舟形町舟形 <sup>4</sup>	08	秩父郡小鹿野町大字三山字半平 <sup>34</sup>	52
最上郡真室川町大字差首鍋字高坂 <sup>4</sup>	08	北葛飾郡吉川町拾耆軒 <sup>34</sup>	57
最上郡大蔵村大字南山字柳瀬 <sup>4</sup>	08	<b>千葉県</b>	
飽海郡平田村大字山谷字三ヶ沢 <sup>4</sup>	08	銚子市高神東町 <sup>4</sup>	57
<b>福島県</b>		夷隅郡夷隅町行川 <sup>4</sup>	57
平市一丁目 <sup>4</sup>	54	君津郡峰上村豊岡志組 <sup>4</sup>	57
白河市旭町二丁目 <sup>4</sup>	54	<b>東京都</b>	
相馬市小野薬師堂 <sup>3</sup>	99	足立区四ツ家町 <sup>4</sup>	57
東白川郡矢祭村大字東館字館本 <sup>4</sup>	54	西多摩郡五日市町小和田 <sup>4</sup>	58
東白川郡塙町大字常世中野字銭神田 <sup>4</sup>	54	(三宅島支庁)三宅村伊豆 <sup>4</sup>	58
南会津郡下郷町大字湯野上字居平 <sup>3</sup>	98	(三宅島支庁)三宅村伊ヶ谷 <sup>4</sup>	58
信夫郡飯坂町茂庭字秋庭 <sup>4</sup>	54	(三宅島支庁)三宅村阿古 <sup>4</sup>	58
伊達郡靈山町大字掛田字岡 <sup>4</sup>	54	(三宅島支庁)三宅村神着 <sup>4</sup>	58
石川郡石川町字北町 <sup>4</sup>	54	(三宅島支庁)三宅村坪田 <sup>4</sup>	58
田村郡船引町大字上移字根岸 <sup>4</sup>	54	<b>神奈川県</b>	
石城郡遠野町大字上根本字表 <sup>4</sup>	54	三浦市三崎町花暮 <sup>4</sup>	49
双葉郡橋葉町上繁岡二枚橋 <sup>4</sup>	54	足柄下郡箱根町元箱根 <sup>4</sup>	49
双葉郡久之浜町 <sup>4</sup>	54	<b>新潟県</b>	
<b>茨城県</b>		新発田市大字山内 <sup>4</sup>	16
常陸太田市町屋町 <sup>34</sup>	55	東蒲原郡上川村大字広谷字八田蟹 <sup>4</sup>	16
高萩市大字下君田字小神戸 <sup>34</sup>	55	東蒲原郡三川村大字岡沢 <sup>4</sup>	16
西茨城郡岩瀬町大字元岩瀬 <sup>34</sup>	11	北蒲原郡水原町大字水原 <sup>4</sup>	16
那珂郡東海村大字須和間 <sup>34</sup>	55	北蒲原郡築地村大字築地 <sup>4</sup>	16
那珂郡緒川村油河内字北田 <sup>34</sup>	55	北蒲原郡黒川村大字坂井 <sup>4</sup>	16
久慈郡水府村大字上高倉字持方 <sup>34</sup>	55	岩船郡関川村大字下関 <sup>4</sup>	16

岩船郡朝日村大字新屋 <sup>4</sup>	16	揖斐郡谷汲村上長瀬 <sup>34</sup>	96
岩船郡山北村大字笹川 <sup>4</sup>	16	武儀郡武儀村下之保字上野 <sup>4</sup>	21
岩船郡山北村大字北田中 <sup>34</sup>	98	武儀郡洞戸村大字奥洞戸字高賀 <sup>4</sup>	21
岩船郡山北村大字大毎 <sup>4</sup>	16	加茂郡八百津町旭町 <sup>4</sup>	21
佐渡郡金井町大字千種小字大和田 <sup>34</sup>	98	大野郡高根村上ヶ洞 <sup>4</sup>	21
佐渡郡羽茂町仮屋 <sup>34</sup>	98	吉城郡上室村大字長倉 <sup>4</sup>	21
<b>富山県</b>		<b>静岡県</b>	
氷見市中田 <sup>34</sup>	17	富士宮市阿幸地 <sup>4</sup>	22
上新川郡大山町上滝 <sup>34</sup>	17	吉原市伝法 <sup>4</sup>	22
婦負郡婦中町外輪野 <sup>34</sup>	17	安倍郡清沢村中村 <sup>4</sup>	22
婦負郡細入村片掛 <sup>34</sup>	17	榛原郡御前崎町大山 <sup>4</sup>	22
<b>石川県</b>		榛原郡川根町家山 <sup>4</sup>	22
輪島市町野町南時国 <sup>34</sup>	17	榛原郡相良町中西 <sup>4</sup>	22
珠洲市狼煙町 <sup>34</sup>	17	榛原郡吉田町片岡 <sup>4</sup>	22
珠洲市宝立町字鶴飼 <sup>34</sup>	17	小笠郡大浜町浜野 <sup>4</sup>	22
珠洲市正院町正院 <sup>34</sup>	17	引佐郡引佐町東黒田 <sup>4</sup>	23
鳳至郡能都町字鶴川 <sup>34</sup>	17	<b>愛知県</b>	
<b>福井県</b>		岡崎市康生通東1丁目 <sup>4</sup>	23
大野郡和泉村川合 <sup>4</sup>	18	津島市下新田町 <sup>4</sup>	21
大野郡西谷村中島 <sup>4</sup>	18	西加茂郡小原村大字平畑 <sup>4</sup>	23
<b>山梨県</b>		南設楽郡鳳来町大字大野 <sup>4</sup>	23
塩山市上小田原 <sup>34</sup>	19	額田郡額田町大字桜形字平岩 <sup>4</sup>	23
東八代郡御坂町上黒駒 <sup>34</sup>	19	渥美郡渥美町大字中山字北郷 <sup>4</sup>	23
西八代郡上九一色村字精進 <sup>3</sup>	19	<b>三重県</b>	
<b>長野県</b>		四日市市水沢町 <sup>34</sup>	56
大町市大字平字森 <sup>34</sup>	96	鳥羽市神島町 <sup>34</sup>	98
飯田市銀座 <sup>34</sup>	20	熊野市五郷町桃崎 <sup>4</sup>	56
塩尻市北小野字古町 <sup>34</sup>	96	熊野市木本町 <sup>4</sup>	56
北安曇郡小谷村下り瀬 <sup>34</sup>	20	南牟婁郡御浜町大字阿田和 <sup>34</sup>	56
北佐久郡軽井沢町長倉 <sup>4</sup>	12	多気郡宮川村大字檜原 <sup>4</sup>	56
上伊那郡高遠町 <sup>34</sup>	20	多気郡大台町佐原 <sup>34</sup>	56
上伊那郡長谷村市野瀬 <sup>34</sup>	20	阿山郡大山田村上阿波 <sup>34</sup>	56
下伊那郡松川町上片桐上町 <sup>34</sup>	20	<b>滋賀県</b>	
下伊那郡根羽村田島 <sup>34</sup>	20	大津市大石中町 <sup>4</sup>	25
下伊那郡下条村大字陸沢字親田 <sup>34</sup>	20	野洲郡野洲町永原江部 <sup>4</sup>	50
下伊那郡大鹿村大河原上市場 <sup>34</sup>	20	甲賀郡甲西町下田 <sup>4</sup>	50
下伊那郡上村上町 <sup>34</sup>	20	愛知郡稲枝町普光寺 <sup>4</sup>	50
諏訪郡富士見町高森 <sup>34</sup>	19	犬上郡多賀町大君ヶ畑 <sup>4</sup>	50
<b>岐阜県</b>		坂田郡山東町梓 <sup>4</sup>	50
美濃市下河和 <sup>4</sup>	21	伊香郡木ノ本町木ノ本小字八木屋町 <sup>4</sup>	18



<b>京都府</b>			
舞鶴市河辺由里 <sup>4</sup>	25	日野郡日南町上石見 <sup>4</sup>	33
綴喜郡井手町大字井手小字野神 <sup>34</sup>	29	<b>島根県</b>	
船井郡瑞穂町橋爪 <sup>4</sup>	25	大田市大代町字大家 <sup>4</sup>	32
与謝郡伊根町本庄上 <sup>4</sup>	25	能義郡布都村大字布部字下布部 <sup>4</sup>	32
与謝郡野田川町三河内 <sup>4</sup>	25	大原郡大東町大字北村 <sup>34</sup>	96
<b>大阪府</b>		飯石郡掛合町西側地区 <sup>34</sup>	96
大阪名城東区関目町4丁目	26	簸川郡大社町大字中荒木字四軒家 <sup>4</sup>	32
河内長野市古野町	26	邑智郡邑智町大字粕刈廻町 <sup>4</sup>	32
羽曳野市古市町 <sup>4</sup>	26	那賀郡旭町大字今市小谷城 <sup>34</sup>	96
<b>兵庫県</b>		那賀郡三隅町大字三隅 <sup>4</sup>	32
明石市大久保町大窪 <sup>4</sup>	28	那賀郡金城村大字今福字五十石 <sup>4</sup>	32
三田市大字藍本字波田 <sup>34</sup>	97	那賀郡弥栄村大字木都賀 <sup>4</sup>	32
三田市三田湯山町 <sup>4</sup>	28	美濃郡匹見町大字紙祖字荒木 <sup>34</sup>	96
加東郡東条町天神 <sup>4</sup>	28	知夫郡知夫村大江 <sup>34</sup>	96
佐用郡佐用町佐用 <sup>4</sup>	28	<b>岡山県</b>	
宍粟郡一宮町安積小字曲里 <sup>4</sup>	28	井原市井原町中町 <sup>4</sup>	34
宍粟郡千種町千草 <sup>4</sup>	28	和気郡日生町中日生 <sup>34</sup>	99
出石郡但東町中山 <sup>4</sup>	28	上道郡上道町浅川 <sup>34</sup>	99
美方郡村岡町味取 <sup>34</sup>	99	上房郡北房町下啓部 <sup>4</sup>	33
三原郡南淡町福良本町 <sup>34</sup>	99	川上郡川上町地頭 <sup>4</sup>	33
<b>奈良県</b>		阿哲郡大佐町永富 <sup>4</sup>	33
吉野郡大塔村篠原 <sup>34</sup>	98	阿哲郡哲西町大字上神代字日長谷 <sup>34</sup>	97
吉野郡上北山村大字西原 <sup>34</sup>	98	真庭郡湯原町下湯原 <sup>34</sup>	99
吉野郡下北山村大字寺垣内 <sup>34</sup>	29	真庭郡川上村上福田 <sup>4</sup>	33
吉野郡川上村字武木 <sup>34</sup>	29	<b>広島県</b>	
<b>和歌山県</b>		尾道市久保町杓子小路 <sup>4</sup>	34
東牟婁郡本宮町請川 <sup>4</sup>	30	福山市笠岡町 <sup>4</sup>	34
東牟婁郡北山村大字大沼 <sup>34</sup>	98	山県郡千代田町本地石原 <sup>34</sup>	96
西牟婁郡大塔村平瀬 <sup>4</sup>	30	高田郡白木町秋山 <sup>4</sup>	34
有田郡清水町清水 <sup>4</sup>	30	豊田郡本郷町本郷字西下岡 <sup>4</sup>	34
日高郡竜神村福井 <sup>4</sup>	30	御調郡御調町丸河南 <sup>34</sup>	96
日高郡美山村川原河 <sup>4</sup>	30	御調郡向島町尻中組 <sup>4</sup>	34
<b>鳥取県</b>		芦品郡駅家町万能倉 <sup>4</sup>	34
東伯郡東伯町大字銀 <sup>4</sup>	31	神石郡油木町油木 <sup>4</sup>	33
東伯郡関金町関金宿 <sup>4</sup>	31	甲奴郡甲奴町本郷 <sup>4</sup>	34
西伯郡大山町宮内 <sup>34</sup>	99	比婆郡東城町備中町 <sup>4</sup>	33
岩美郡国府町大字栃本 <sup>4</sup>	31	<b>山口県</b>	
八頭郡智頭町波多 <sup>34</sup>	99	下ノ関市武久 <sup>34</sup>	40
気高郡鹿野町大字鷺峰 <sup>4</sup>	31	徳山市大字徳山字西今宿 <sup>4</sup>	35
		岩国市西岩国本町1丁目 <sup>4</sup>	35

長門市俵山郷 <sup>34</sup>	96
大島郡大島町大字小松字北方石丸 <sup>4</sup>	35
大島郡東和町伊保田字吉賀 <sup>34</sup>	96
大島郡橋町大字西安下庄字正分 <sup>4</sup>	35
玖珂郡錦町大字広瀬字下向 <sup>4</sup>	35
玖珂郡美和町大字下畑字神谷 <sup>4</sup>	35
熊毛郡平生町大字平生村字沼 <sup>4</sup>	35
阿武郡阿東町大字篠部字篠目 <sup>34</sup>	97
<b>徳島県</b>	
那賀郡木頭村大字北川字大地平 <sup>34</sup>	98
美馬郡貞光町北町 <sup>4</sup>	36
美馬郡脇町下曾江 <sup>4</sup>	36
美馬郡一字村大字川又実平 <sup>34</sup>	98
三好郡三加茂町 <sup>4</sup>	36
三好郡池田町谷町 <sup>4</sup>	36
三好郡池田町大利込 <sup>4</sup>	36
<b>香川県</b>	
丸亀市本島町泊 <sup>34</sup>	97
小豆郡内海町草壁 <sup>34</sup>	37
綾歌郡綾南町大字滝宮 <sup>34</sup>	37
仲多度郡琴南村中通本村 <sup>34</sup>	97
三豊郡豊中町笠田字笠岡 <sup>34</sup>	37
<b>愛媛県</b>	
松山市東野町 <sup>4</sup>	38
西条市西之川山字名古瀬谷 <sup>34</sup>	97
大洲市六洲本町2丁目 <sup>4</sup>	38
大洲市森山字富谷 <sup>4</sup>	38
東宇和郡野村町野村本町3丁目 <sup>4</sup>	38
北宇和郡津島町御内 <sup>34</sup>	97
温泉郡川内町大字則之内字一ヶ谷 <sup>4</sup>	38
越智郡玉川村大字鈍川字中通 <sup>34</sup>	97
上浮穴郡小田町字町村 <sup>4</sup>	38
喜多郡長浜町籬生 <sup>4</sup>	38
<b>高知県</b>	
中村市巖岡藤 <sup>4</sup>	39
中村市有岡 <sup>4</sup>	39
中村市下田町 <sup>4</sup>	39
土佐清水市下ノ加江町小方 <sup>34</sup>	98
安芸郡東洋町大字野根 <sup>34</sup>	98
長岡郡大豊村角茂谷 <sup>4</sup>	39

高岡郡大野見村大字奈路 <sup>34</sup>	98
高岡郡禰原村禰原 <sup>4</sup>	39
幡多郡西土佐村藤ノ川中屋敷6番屋敷 <sup>4</sup>	39
幡多郡大月町姫ノ井 <sup>4</sup>	39
<b>福岡県</b>	
小倉市大字木ノ下 <sup>34</sup>	40
行橋市字中津熊 <sup>34</sup>	40
豊前市松江 <sup>34</sup>	40
浮羽郡浮羽町大字小塩字小松堀 <sup>34</sup>	44
<b>佐賀県</b>	
東松浦郡呼子町 <sup>34</sup>	41
杵島郡大町町大字福母字中島 <sup>34</sup>	41
<b>長崎県</b>	
平戸市志々伎町 <sup>34</sup>	97
西彼杵郡野母崎町高浜 <sup>34</sup>	97
西彼杵郡琴海村長浦 <sup>34</sup>	97
南松浦郡玉之浦町中須郷 <sup>34</sup>	97
南松浦郡奈良尾町奈良尾 <sup>34</sup>	97
北松浦郡宇久町平字佐賀里 <sup>34</sup>	97
北松浦郡福島町塩浜 <sup>34</sup>	41
北松浦郡江迎町大字長坂字梶野村 <sup>34</sup>	97
北松浦郡世知原町木浦原免 <sup>34</sup>	41
北松浦郡鷹島村神崎 <sup>34</sup>	41
下県郡美津島町大字鶏知 <sup>34</sup>	41
下県郡豊玉村大字仁位 <sup>34</sup>	41
下県郡岐原町天道茂 <sup>34</sup>	41
下県郡岐原町大字豆殻 <sup>34</sup>	41
<b>熊本県</b>	
熊本市細工町 <sup>4</sup>	43
人吉市城本町 <sup>4</sup>	43
本渡市本渡町大字本渡字内楠 <sup>3</sup>	43
上益城郡矢部町大字浜町 <sup>4</sup>	43
宇土郡三角町大字三角浦字本村 <sup>4</sup>	43
鹿本郡菊鹿村大字矢谷字下矢谷 <sup>4</sup>	43
阿蘇郡高森町上町 <sup>4</sup>	43
阿蘇郡小園町大字上田字蔵園 <sup>4</sup>	43
八代郡坂本村大字荒瀬字洪利 <sup>4</sup>	43
球磨郡球磨村大字一勝地 <sup>4</sup>	43
球磨郡五木村大字高野 <sup>4</sup>	43
<b>大分県</b>	

大分市大字三芳字椎迫 <sup>34</sup>	44	彌噠郡鄰北町上百引 <sup>34</sup>	46
中津市大字上宮永 <sup>34</sup>	40	肝属郡東串良町大字池之原 <sup>34</sup>	46
日田市大肥本町 <sup>34</sup>	44	肝属郡大根占町大字馬場笹原 <sup>34</sup>	46
日田郡榮村合田字袖ノ木 <sup>34</sup>	44	肝属郡佐多町大字伊座敷 <sup>34</sup>	46
日田郡中津江村大字栲野字下鶴 <sup>34</sup>	44	熊毛郡上屋久町宮之浦 <sup>34</sup>	46
下毛郡耶馬溪村大字大島 <sup>34</sup>	44	熊毛郡屋久町尾之間 <sup>34</sup>	46
下毛郡耶馬溪村大字深耶馬小柿山 <sup>34</sup>	44	<b>沖繩</b>	
<b>宮崎県</b>		中部地区(中頭郡)与那城村字平安	
都城市東町4丁目 <sup>4</sup>	45	座 <sup>(34)</sup>	51
西都市大字右松字栗野 <sup>4</sup>	45	中部地区(中頭郡)中城村字伊舎堂 <sup>34</sup>	51
北諸県郡高崎町大字大牟田 <sup>4</sup>	45	南部地区(島尻郡)与那原町浜田区 <sup>34</sup>	51
東臼杵郡南郷村大字神門 <sup>4</sup>	45	南部地区(島尻郡)名満町 <sup>34</sup>	51
南那珂郡北郷町大字北河内字坂元 <sup>4</sup>	45	北部地区(国頭郡)国頭村字奥 <sup>34</sup>	51
児湯郡都農町下苺生 <sup>4</sup>	45	北部地区(国頭郡)国頭村字辺野喜 <sup>34</sup>	51
児湯郡西米良村大字村所 <sup>4</sup>	45	北部地区(国頭郡)大宜味村字喜如	
<b>鹿児島県</b>		嘉 <sup>(34)</sup>	51
揖宿郡額娃町大字上別府青戸 <sup>34</sup>	46	北部地区(国頭郡)本部町字渡久地 <sup>34</sup>	51
薩摩郡高城町大字西方 <sup>34</sup>	46	北部地区(国頭郡)名護町字城 <sup>34</sup>	51
薩摩郡里村里 <sup>3</sup>	46	北部地区(国頭郡)恩納村字名嘉真 <sup>(34)</sup>	51
薩摩郡下飯村手打 <sup>3</sup>	46	北部地区(国頭郡)羽地村字源河 <sup>34</sup>	51
始良郡横川町大字中ノ <sup>34</sup>	46		以上354地点

## 2. 同行調査

以下の地点では、地方研究員に調査センターである地方言語研究室の室員が同行して調査し、調査現場で起こるいろいろな事態について打ち合わせをして、全国での調査が統一して行なわれるように努めた。同行調査に参加した2名の地方研究員は、昭和36年度から新たに研究員に加わった人々である。

地 点 名	地方研究員氏名	同行室員氏名
埼玉県北葛飾郡吉川町拾巻軒	後藤 和彦	野元 菊雄
埼玉県川口市十二月田町	馬瀬 良雄	徳川 宗賢

## 3. 調査者の言語の調査

昭和35年度までに集めた「調査者の言語」の調査結果を補充するために、新しく研究員に加わった2名についての資料と、従来から継続している研究員についての、第4調査票に関する資料を集めた。

## E. 来年度以降の計画について

日本言語地図作成のための調査は、来年度から後期計画にはいる。前期計画では、調査項目は全国一率とし、調査地点はほぼ等間隔に採るなど、やや機械的と思われる方針に従ったが、後期計画では、調査の効率を高めるために、調査項目も調査地点も重点主義を採ることにした。

### 1. 調査項目について

これ以上調査しても全国の分布の模様がいっそうはっきりするという見通しのつかない項目があるので、それは除くことにする。これによって、いくつかの項目が減るので、第3・第4調査票を加えて調査しても時間的な労力はほとんど変わらないことになる。また、項目によっては、ある地域では残すが、ある地域では除くということになるので、後期調査の項目は、各地方にとって必ず地域差の出るものばかりである。したがって、これは今後、各地方で狭い地域の分布調査をする際の地域調査票を作成する場合に役立つと考えられる。

このような考えで、地方言語研究室では分布図を1枚ずつ検討しながら、全国的に調査を打ち切る項目、地域的に調査を打ち切る項目を選び出しつつある。もちろん、決めがたいものはできるだけ調査を続ける方へ入れるようにしている。最終的な結論はまだ出ていないが、274項目（285項目のうち11項目は第3年度までで打ち切っている）のうち、全国的に打ち切る項目約55、地域的に打ち切る項目約35になるとと思われる。したがって、項目が一番多く減る地域でも、それは90項目ぐらいにとどまる。

### 2. 調査地点

地方言語研究室では、昨年度以来、後期計画にあたってどのような地点を選ぶべきか、地方研究員に対して、担当地域に関する希望を求めてきた。希望を表明した研究員は、47名中34名、地点数は計543にのぼった。これらの地点は、①分布上の観点から（前期計画における地点の分布から見て、ここにもう1地点ほしい）、②言語的・社会的観点から（重要な地域だから、地点の密度をさらに濃くしたい、あるいは、特殊な地域社会だから、この際ぜひ調査しておきたい、など）選ばれている。

しかし、ある県は50地点も希望しているのに対して、ある県は3地点しか希望していないといった不均衡がある。希望が全くなかったからといって、その県はもう調査しなくてもいいということもあるまい。また、研究員ひとりについての地点数も、期間が限られている以上限度がある。後期計画には、調査に困難が伴う辺地が多く選ばれることになるから、あまり多くは望めない点もある。第3・第4調査票については、前期計画での調査地点が片寄っているから（原則として1年間しか調査してない）、万遍なく調査地点を選ぶ方針を全く捨て去るわけにもいかないこともある。全国的な視野に立った調整がどうしても必要である。

地方言語研究室では、本年度、研究員からの希望を参考にしつつ、後期計画の候補地点をしぼる作業を行なった。最終的な結論はまだ出ていないが、後期計画で調査される地点の総計は、600以上700以下となるであろう。

(柴田・徳川)

# 中学校生徒の言語能力の発達に関する研究

## A. この研究の目的と計画

国語教育研究室では、今までに小学生の言語能力の発達に関する調査研究を行ってきたが、小学校の段階が一応完了したので、引きつづき中学校の生徒の言語能力の発達に関する研究を行なうことにした。

この研究の目的は、義務教育終了者として必要な言語能力が、1年から3年までの中学校の過程で、どのように発達していくかを、その発達の要因とともに明らかにすることで、逐年継続調査法による、事例的発達調査を予定している。しかし、継続調査を始める前に、あらかじめ、中学校1年から3年までの間にみられる発達の実態、傾向、問題点等を概観し、中学校の特殊性に適した調査方法、調査問題等をも検討しておく必要があるので、昭和36年度は、中学生の言語能力の実態についての概観調査をすることにした。

## B. 研究担当者と実施概要

### 1. 研究担当者

輿水 実（第2研究部長）、芦沢 節、村石昭三、吉沢典男

なお、研究補助員根本今朝男、川又瑠璃子が参加し、作業を助けた。

### 2. 研究実施概要

中学生の言語能力の事例的発達調査の前提として、中学生の言語能力の実態および発達調査上の問題点をさぐるために、次の要領で調査を進めた。

2.1 調査の対象と機構 中学校の全学年の各1学級分の生徒を調査対象にした。調査実施校は、一二の特定地域に限らず、なるべくいろいろな地域の特殊性が出るように、大都市、地方都市、農村、山村、漁村、炭坑地域の性格をもった学校から選び、あらかじめ、それぞれの地域から出そうな問題点を、できるだけ把握することができるようにとの意図から、次の6校に依頼した。

東京都新宿区四谷第二中学校	神奈川県中部比々多中学校
* 滋賀県大津市打出中学校	長野県諏訪郡富士見南中学校

\* 宮城県桃生郡雄勝中学校

\* 佐賀県多久市中部中学校

\* これらの中学校の選定については、滋賀県立教育研究所指導主事池田新市氏、宮城県立教育研究所指導主事岩下忠男氏、佐賀大学教授小野志真氏のご配慮をいただいた。

6校のうち、東京、神奈川、滋賀の各中学校には、それぞれ小学生の言語能力の調査対象児であった幾人かが進学していて、その後の発達状況もあわせてみられるようになっている。

(なお、各1学級分の生徒を調査対象にとりあげたが、学校側からの要望で2学級分実施したところもあり、延べ1,213人となった。)

2.2 調査項目 実態調査のためのテスト実施に先立って、4月～9月の間に、中学生に関する各種の研究調査資料、教科書などの収集・分析・検討を行なった。

ことに、言語能力テストのための問題作成にあたって従来行なわれた中学生の諸種の国語学力に関する調査問題・結果を参考とし、各社の国語教科書の教材研究を行ない、各社の国語教科書における漢字の提出状況をも調べた。

調査項目は、聞き方、話し方(いずれも録音器使用)、読解、読書量(読書速度)、作文、文字(漢字)、語彙、文法、表記(送りがな・かなづかい)、付帯調査(文字・語彙、作文の発達要因をみる)にわたり、テスト所要時間は延べ8時間を要する規模のものとなった。

これらのテスト問題は、義務教育終了者として一応必要な言語能力という観点に立ち、それが中学3年終了までどの程度習得されているか、中学生としての学年的な発達状況はどうか、小学生と比べてどのように発達しているかなどがみられるように配慮して問題を作成した。同一の条件でテストが実施できるようにテスト実施のための手引き(A5 21ページ)をも作った。

各テストのうち、話し方テストなどは、研究所から所員が各学校に出向いて直接録音器に収録した(中部中学校のみ、学校側で実施)が、他は手引きに従って学校側で実施した。

2.3 テスト実施の時期 昭和36年12月。中学校では、36年から文部省の「全国中学校一せいで学力調査」が行なわれることになり、それが10月26日に実施されたので、その調査のあと、11月下旬から12月上旬という予定で、われわれのテストを開始したが、学校側の諸事情(文部省調査の集計のあと始末、進学準備

等)で、テスト実施に意外に時間がかかり、12月中旬、なかには年を越えて1月に実施した学校もあった。

2・4 調査物の回収および結果処理 調査物はすべて現物のまま(答案そのもの)回送してもらい、われわれの手で結果の処理にあたったが、回収の時期が区々で、遅延したために、結果の集計整理の着手が遅れ、整理作業も36年度中には、1部分にとどまるという状況であった。したがって、この調査の結果の整理作業は、その大半が昭和37年度に持ちこされることになった。この調査の成果は、37年度で、報告書の形にしてまとめる予定であるので、ここでは、実施の概要にとどめた。

(芦沢)



# 国語文章の横組みのための印刷条件の研究

## A. 研究の経過と目的

この研究は、国語の文章を横組みに印刷する場合、どのような条件を満足させたなら、最も読みやすく、わかりやすいかを、実験的に確かめることを目的とするものである。

横組みに適した印刷条件として問題となる事がらとしては、文字の大きさ、線の太さ、字形、書体（スタイル）、行の長さ（字詰め）、行間のあきぐあい、分ち書きかべた組みか、用紙の紙質と色、インキの色と濃さなどがあるが、われわれは35年度から字形の問題を取りあげていろいろ実験を重ねてきた。すなわち、平体（横長）、正体（真四角）、長体（縦長）の3種類の字形を比較して、横組みには、どの字形が最も読みやすいかを判定しようとしたのである。ところで、一般に印刷物が読みやすいといわれるためには、(1)速く読める、(2)理解しやすい、(3)疲労が少ない、(4)見た目にきれいである、などの条件を満足させることが必要だとされているが、35年度は、とくに(1)と(2)について調べ、本年度はそれに(4)を加えて調べた。(3)については手が及ばなかった。

35年度には、同一の文章を、平体・正体・長体の3種類の字形で印刷して、その読了速度と、理解度とを、中学生および高校生を対象に集団調査により測定しようとしたのであるが、その結果をごく簡単に言うと、横組み印刷では、長体のものが最も速く読まれ、次いで正体・平体の順位であった。理解度は三者の間に優劣の差はなかった。なお、比較のため、縦組みについても調べたが、縦組みでは、横組みとは逆に、速い方から平体、正体、長体の順位であった。

## B. 研究担当者

本年度の研究は、第2研究部言語効果研究室に属する次の3名の所員が共同で当たった。

永野 賢      高橋太郎      渡辺友左

なお、研究補助員宮地美保子が集計整理などの作業を助けた。

## C. 研究の計画と実施要領

本年度は、35年度の研究結果を確かめ、さらに広げ、深めるために、次のように問題を設定し、計画を立て、実験研究を行なった。

### 1. 集団による作業の遅速の調査

(1) 文章の読了速度の比較——同じ文章を3種類の字形で印刷し、どの字形のものが最も速く（かつ正確に）読まれるかを調べる。方法は前年度と同じく読解テストの形式とし、一定時間内に読み終えた字数によって、遅速を比較する。

(2) 語の認知の速さの比較——文章でなく、1語1語を読むばあいはどうであるかを調べる。方法は、平がな3字から成るいくつもの語を無意味に横組みに配列したものを3種の字形によって印刷し、その中から、指定された語を選んで、鉛筆で印をつける作業をさせる。これによって、どの字形のものが最も速く進むかを調べる。

(3) 字の認知の速さの比較——文章でも語でもなく、1字1字を認知する速さは3種類の字形でどれがすぐれているかを調べる。方法は、いくつもの平がなを無意味に横組みに配列したものを3種の字形によって印刷し、その中から、指定されたかなを選んで、鉛筆で印をつける作業をさせる。これによって、どの字形のものが最も速く進むかを調べる。

((2)と(3)とは、心理テストで「抹消検査」と言っているものの応用である。) 以上の三つの事項を、中学生・高校生を対象に集団調査を実施した。

○準備調査 5・6月 東京都武蔵野市立三中・東京都千代田区立一ツ橋中・東京都立向島工業高校・私立成蹊学園 高校、2・3年生 約400名

○本調査 7月 武蔵野市立三中3年生 294名、東京都立上野高校1年生 286名

○補充調査 12月 武蔵野市立三中1年生 186名

### 2. 個人の眼球運動の観察

1の調査は、3種の字形を別々に読んだ集団の平均値の比較であって、だいたいの傾向を見ることができるとどまるものである。それで、同じ人がちがった字形のものを読んだばあい、どの字形が優れているかを調べてみる必要がある。そこで、眼球運動を記録する装置（オフサルモグラフ）によって、同じ文章をちがった字形で印刷したものを同一人が読んだばあいの眼球運動を記録し、比較検討することとした。同じ人が同じ文章を読むわけであるから、先に読んだ字形とあとに読んだ字形とでは条件がちがってくるので、その条件のちがいを消す方法を考え、また、方法を簡略化するために、平体と長体との2種の比較にしぼって実験した。

被験者は、国立国語研究所の所員・同じく研究補助員・同研究所への内地留學生から選んだ。9月に10名（男6名・女4名）、2月に11名（男5名・女6名）について調べた。（男5名と女4名は同じ人である。）

### 3. 個々人の意見と意識のアンケート

1と2とは、いわば客観的な観察による判定であるが、それと同時に、字形のちがいが、個々人の主観にはどのように映ずるかを調べる必要がある。そこで、3種の字形で印刷した文章について、(1)どれが速く読めると感じるか、(2)どれが理解しやすいと感じるか、(3)どれが読みやすいと感じるか、(4)どの印刷面がきれいだと感じるか、の印象をたずねる調査票を作り、文字生活に関係の深い一般社会人（通信調査）と大学生（集団調査）とから回答を求めることとした。なお、この調査票では、長体の分かち書きをも比較の要素として加え、また、各個人の横書きの習慣と横組みに対する現状認識や将来のあり方についての意見などをもたずねる質問を加えた。

被調査者は一般社会人として、研究者（国語・言語・教育・心理・印刷・眼科）、教員（小学校——大学）、外国文学者・翻訳家、新聞・放送・出版・編集関係者、印刷関係者、宣伝広告関係者、文書実務家、自然科学者、計307名（うち、回収209名）を選び、また、大学生は、東大・東京教育大・東京外語大・早稲田大・立教大・成蹊大・日本女子大の文科系理科系および男女にわたり、計291名に対し、12月に調査した。

## D. 結果の報告

以上の実験, 調査によって, いろいろの結果が得られたが, 要約して述べることは, ここでは避けたい。別に報告書として『国語文章の横組みに関する研究』を刊行する予定である。ここに述べきれなかった方法上の細目や, 一々のデータや, 結果とその解釈などについては, すべて同書にゆずることとする。

(永野)

# 明治時代語の調査研究

## A. 調査の概観

近代語研究室の昭和35年度までの語彙調査の結果を、自立語の、異なる語の数について概括すると、次のようになる。(ただし固有名詞の類を除く)

① 郵便報知新聞	30,796語	昭30~33
② 学術論説関係文献22種	15,436語	昭33, 34
③ 小新聞(読売新聞, 東京絵入新聞)	8,394語	昭35, 36
④ 交易問答	934語	昭35, 36
⑤ 安愚楽鍋	4,131語	昭35, 36

以上の語は、①から⑤までそれぞれ独立の語彙表に記録されている。そのうち①の分は、国研報告15『明治初期の新聞の用語』として刊行されたが、②～⑤の語彙表は、まだ原稿のままである。

ここで、明治初期の書きことばの語彙調査に一応の区切りをつけて、昭和36年度以後は、採集された語を各種の観点から整理することにした。整理の観点としては、次のようなものが考えられる。

- 1) 各文献の語彙の間では、かなりの語が重複しているわけだから、重複を整理して全体を通覧する語彙表を作る。
- 2) 各文献の文体の相違に着眼して、文体と用語との関連を考察する。文体を大きく硬文体、軟文体の二種類に分けて、各文献の文体を示すと、

硬文体	{ 学術論説関係文献, 郵便報知新聞の a, b, d, e 各層	(注) 郵便報知新聞の層別の 性格については報告15の 15~16ページに示して ある。
軟文体	{ 郵便報知新聞の c 層 小新聞 交易問答 安愚楽鍋	

のように分かれる。

- 3) 各文献の中での語の現われ方すなわち出現頻度と、5種類の文献にわたっての語の現われ方すなわち出現範囲との両面から、語の現われ方を見、また両者の関係を見る。

- 4) 採集したすべての語について、使用文献の範囲内での意味用法を記述しておく。
- 5) 現代語の語彙と比較して、現代に残っている語と残っていない語とを区別する。また、語形は現代語と同じでも意味が変化した語に注目する。
- 6) 各語の語種および品詞を調べて、近代語としての特色を考察する。
- 7) 語の表記法を調べて、近代語としての特色を考察する。

今年度の1年間では、上記観点の1), 2), 3), 6), 7) による作業を行ない、1), 2), 3)のためには総合語彙カードの作成を行なった。4), 5)による作業には、まだ、手をつけない。仕事は次のように分担した。

総合語彙カードの作成	林 四郎
語種・品詞の調査	山田 巖, 進藤咲子
表記の調査	進藤咲子

これらの調査を研究補助員中曾根仁、宮島秋子がたずけて作業したほか、臨時作業員が一部を手伝った。

## B. 総合語彙カードの作成

### 1 立 案

昭和35年度までに作った語表では、語種の考察をするのに次のような不便がある。

- 1) ある語が①～⑤の、いくつの文献にまたがって出てくるかは、いちいち5種類の語彙表を見なければわからない。
- 2) 刊行された郵便報知新聞の語彙表で、使用度数10（使用率 0.1%）以上の語には使用度数がしるしてあるが、度数9以下のものには度数がしるしてない。
- 3) 郵便報知新聞の調査では、記事を a から e までの層、および物価広告欄に分けて層別抽出をしたが、語彙表には、それぞれの語がどの層にあったものかがしるしてないので、文体との関連がわからない。

以上の不便を解消するためには、全体が通覧できてしかも調査した限りでの数量的事実がすぐにわかる語彙表を作らなければならない。その語彙表のもとに



	(略 称)	(カード面の標記号)
1. 学術論説関係文献	学術文献	ガ
2. 郵便報知新聞 a b d e 層	郵報 a e 層	ユ <sub>1</sub>
3. 郵便報知新聞 c 層	郵報 c 層	ユ <sub>2</sub>
4. 交易問答と安愚楽鍋の合併	交安	コア
5. 読売新聞と東京絵入新聞の合併	小新聞	ヨエ

(注) 4と5とをさらに合併して俗文献と呼び、カード面では、ゾと標記する。

集計項目は次のようにAからQまでの16項目に整理される。

- A 第1音節の行(子音)〔アカサタナハマヤラワ〕
- B 第1音節の段(母音)〔アイウエオ〕
- C 第2音節による大区分〔前半, 後半〕
- D 5 類別文献における出現範囲〔1～5〕
- E 5 類別文献における所属文献〔ガ, ユ<sub>1</sub>, ユ<sub>2</sub>, コア, ヨエ〕
- F 学術文献23種内での出現範囲〔1～23を4 級別に〕

(注) 学術文献を22種としたり23種としたりするのは、「東京学会院雑誌」を1文献とかぞえたり、邦人創作の部と翻訳の部とに分けて2文献とかぞえたりするからである。ここでは、以下23種とする。

- G 郵便報知5層内での出現範囲〔1～5を4 級別に〕
  - H 俗文献4種内での出現範囲〔1～4〕
  - I 郵便報知内での出現頻度〔度数を4 級別に〕
  - J 郵報 a e 層内での出現頻度〔度数を4 級別に〕
  - K 郵報 c 層内での出現頻度〔度数を4 級別に〕
  - L 交安合併出現頻度〔度数を4 級別に〕
  - M 小新聞合併出現頻度〔度数を4 級別に〕
  - N 硬文体27文献内での出現範囲〔1～27を4 級別に〕
- (注) 学術文献の23と郵報 a e 層の4とを合併して硬文体27文献とする。
- O 軟文体5文献内での出現範囲〔1～5を4 級別に〕
- (注) 郵報 c 層と俗文献4種とを合併して軟文体5文献とする。
- P 語種別〔和語, 漢語, 洋語, 混種語, 不明〕
  - Q 品詞別〔名詞, 代名詞, 数詞, 動詞, 形容詞, 副詞, 感動詞, 連体詞, 接続詞〕

記載例によって説明すればいちばんいいのだが、それは、集計結果が明らかに  
なる次年度にゆずる。

## 2 調査の経過

7月中にカード5万枚の印刷を終え、8月から3月までに各語彙表から総合語彙カードに転記を終えた。語彙表には度数や層別がしるしてないので、それらを記入するため、原集計カードにさかのぼって記帳したので、この作業は非常に手間がかかった。予定では、全項目の記入から、ペンチング、集計まで終



えるつもりだったが、手不足で果さず、P項Q項、すなわち語種と品詞の記入、および集計作業は次年度に回さなければならなかった。ただし、語種判定の作業と俗文献の語彙についての語種別集計は、別項にするすように行なっている。

### 3 調査の結果

集計が行なわれていないので、結果はまだ述べられないが、カードの採集総枚数と、部分的に集計したところだけ、しるしておく。

3.1 総枚数は、固有名詞関係のもの 2,601枚を除いて、44,465枚である。

第1音節の五十音順によって、その内訳を示す。

ア	959	イ	1,733	ウ	733	エ	513	オ	1,126	ア行計	5,064
カ	3,274	キ	2,341	ク	783	ケ	1,195	コ	2,498	カ行計	10,091
サ	1,488	シ	5,675	ス	578	セ	1,663	ソ	967	サ行計	10,371
タ	1,738	チ	1,133	ツ	644	テ	844	ト	1,666	タ行計	6,025
ナ	685	ニ	541	ヌ	71	ネ	204	ノ	234	ナ行計	1,735
ハ	1,577	ヒ	1,207	フ	1,299	ヘ	550	ホ	1,140	ハ行計	5,773
マ	504	ミ	504	ム	247	メ	366	モ	523	マ行計	2,180
ヤ	434			ユ	423			ヨ	677	ヤ行計	1,534
ラ	163	リ	710	ル	41	レ	199	ロ	284	ラ行計	1,397
ワ	294							ヲ	1	ワ行計	295
										総計	44,465

3.2 アの部に属する 959語について、5 類別文献における出現範囲だけに着眼して、範囲5 から範囲1 までに属する語がどのように分布するか、2 種類以上の文献にまたがるものはどのようなまたがり方をするか、その様子を次の表によって示す。

この表でみると、959語の 73.3%に当たる 702語は、1 種類の文献にしか現われなかった語である。残りの 257語は2 種類ないし5 種類の文献にまたがって現われている。そのまたがり方を見ると、硬文体は硬文体どうし、軟文体は軟文体どうしでまたがる傾向が強いことが、ざっと看取されるが、これについては全体の集計が終ってから考察する。

範囲	語数	語数内訳	ガ	ニ <sub>1</sub>	ニ <sub>2</sub>	コア	ヨニ
5	21	21	○	○	○	○	○
4	23	9		○	○	○	○
		8	○	○	○	○	
		4	○	○	○	○	
		2	○	○	○	○	
		0	×	×		×	
3	71	23	○	○	○		○
		18		○	○		○
		14		○	○		○
		7	○	○			○
		3	○	○			○
		2	○	○			○
		2	○	○			○
		1	○	○			○
		1	○	○			○
		0		×		×	×
2	142	37			○		○
		29			○		○
		18		○	○		
		17	○	○			
		14		○	○		
		12		○	○		○
		7		○			○
		4	○				○
		3	○				○
		1		○			○
1	686	211	○		○		
		146		○			○
		126					
		122					
		81					
	16	16		○			
				(物広のみ)			
計	959						

(注) 1. 郵便報知の「物広のみ」に16語あり別扱いになっている。物産広告欄は、報告15で追加語彙表に示された語を採集したときにはじめて調査対象となつたもので、はじめは対象から除外されていた特殊な欄である。ここでは一つの層にかぞえなかつた。  
2. 表内の×印は、そのような組み合わせのまたがり方をした語が無かつたことを示す。

### C. 語種の調査

語種調査<注>は、今までに近代語研究室が採集した見出し語(郵便報知新聞, 学術論説的文献22種, 小新聞, 交易問答, 安愚楽鍋)全部について行なっている。

作業の手順に二つの段階を設けた。はじめの段階で、小新聞, 交易問答, 安愚楽鍋の用語について調査した。これを最初に選んだのは、これらが軟文体の用語として、くくることのできるものであること、言いかえ

れば、硬文体の用語とは、かなり違っているという予想があること、また、これらは比較的語彙量が少ない(総語数13, 459語)ので、これによって、語種認定上の諸問題を検討し、作業規準を作ることが、作業手続の上で便利であることなどを考えたためである。

第2段階では、郵便報知新聞, 学術論説的文献22種の調査を行ない、目下整理中である。

第2段階の調査の完了をまって、くわしい報告を予定している。ここには、第1段階における調査結果を表にして示しておく。

なお、各文献の調査語数は、固有名詞と普通名詞によって構成されている語（例：伊藤内務卿，大阪造幣局），および、それに準じる語の大部分を除いたため、33ページに示した数よりやや減じてつぎのようになった。

小新聞	8,049語
交易問答	921語
安愚楽鍋	4,061語
計	13,031

<注>語種認定の規準

漢語 中国起源の語—漢音、吳音、唐宋音—のほか、日本製漢語（参議、物騒）など字音よみの語、および梵語（音訳語があるかないかが問題になるが）。

和語 「赤い」「ふるさと」のようなやまとことばのほか、「絵」「銭」とか「唐」「寺」など古い時代に日本に入ってきたもので、漢語とか朝鮮語とかの意識を伴わない語など。

外来語 ポルトガル語、スペイン語、オランダ語、英語など西洋に本籍のあることばのほか、アイス語、朝鮮語、近代中国音の語など。

混種語 上記の語種二つ以上の結合したもの。

この表について簡単に説明する。

第1表

語種と品詞との関係を、調査して得た見出し語の全体について見ていったものである。全体を100とおいた場合の割合をカッコの中に示してある。カッコの上の数字が実数である。

名詞の中には、いわゆる形容動詞の語幹が含まれている。

混種語の中には、(1)漢語サ変動詞および漢語にサ変対等の動詞（遊ばす、下さる、なさる、致すなどの類）がついたもの、(2)「一向に」「段々と」のように漢語副詞に「と」「に」がついて混種語となったものがある。これらを、それぞれ動詞、副詞の中で特にとり出してある。混種語の動詞一般というのは、「目論む」「御座る」「可愛がる」のようなものである。また、混種語の形容詞は、「非道い」「頑はない」のようなものである。

この表の最下段の計を見ると、小新聞、交易問答、安愚楽鍋ともに漢語の数が和語の数より少ない。混種語には、成分として取出せば、漢語として適用するものかなりある（例えば、「学問<スル>」「<オ>世話」「鉄砲<方>」

第1表—(1)

## 小新聞の用語の品詞別・語種別分布—実数と比率

( )内は、見出し語の総数 8,049を 100とする%

	漢 語	和 語	外 来 語	混 種 語	計
名 詞	2,548 (31.7)	2,017 (25.0)	16 (0.2)	685 (8.5)	5,266 (65.4)
{ 名 詞	2,544 (31.6)	1,974 (24.5)	16 (0.2)	684 (8.5)	5,218 (64.8)
{ 代 名 詞	4 (0.1)	43 (0.5)	—	1 (0.0)	48 (0.6)
動 詞	—	1,611 (20.0)	—	354 (4.4)	1,965 (24.4)
{ 動 詞 一 般	—	1,611 (20.0)	—	13 (0.2)	1,624 (20.2)
{ サ 変 動 詞	—	—	—	341 (4.2)	341 (4.2)
形 容 詞	—	195 (2.4)	—	20 (0.3)	215 (2.7)
副 詞	66 (0.8)	401 (5.0)	—	27 (0.3)	494 (6.1)
{ 副 詞 一 般	66 (0.8)	401 (5.0)	—	5 (0.1)	472 (5.9)
{ 漢 語 + {と に	—	—	—	22 (0.2)	22 (0.2)
連 体 詞	12 (0.2)	17 (0.2)	—	1 (0.0)	30 (0.4)
接 続 詞	1 (0.0)	33 (0.4)	—	—	34 (0.4)
感 動 詞	—	44 (0.6)	—	1 (0.0)	45 (0.6)
計	2,627 (32.7)	4,318 (53.6)	16 (0.2)	1,088 (13.5)	8,049 (100)

第1表一(2)

## 交易問答の用語の品詞別・語種別分布一実数と比率

( )内は見出し語の総数 921を 100とした%

	漢 語	和 語	外 来 語	混 種 語	計
名 詞	222 (24.1)	227 (24.7)	3 (0.3)	34 (3.7)	486 (52.8)
{ 名 詞	221 (24.0)	205 (22.3)	3 (0.3)	34 (3.7)	463 (50.3)
{ 代 名 詞	1 (0.1)	22 (2.4)	—	—	23 (2.5)
動 詞	—	218 (23.7)	—	17 (1.8)	235 (25.5)
{ 動 詞 一 般	—	218 (23.7)	—	2 (0.2)	220 (23.9)
{ サ 変 動 詞	—	—	—	15 (1.6)	15 (1.6)
形 容 詞	—	50 (5.4)	—	—	50 (5.4)
副 詞	12 (1.3)	89 (9.7)	—	12 (1.3)	113 (12.3)
{ 副 詞 一 般	12 (1.3)	89 (9.7)	—	5 (0.5)	106 (11.5)
{ 漢 語 + {と {に	—	—	—	7 (0.8)	7 (0.8)
連 体 詞	—	9 (1.0)	—	—	9 (1.0)
接 続 詞	1 (0.1)	22 (2.4)	—	—	23 (2.5)
感 動 詞	—	5 (0.5)	—	—	5 (0.5)
計	235 (25.5)	620 (67.4)	3 (0.3)	63 (6.8)	921 (100)

第1表一(3) 安愚楽鍋の用語の品詞別・語種別分布・実数と比率

	漢		和		外		混		計	
	全	地の文	全	地の文	全	地の文	全	地の文	全	地の文
名	1,013 (24.9)	377 (24.6)	1,231 (30.4)	507 (33.1)	34 (0.8)	19 (1.2)	426 (10.5)	174 (11.4)	2,704 (66.6)	1,077 (70.3)
{名	1,011 (24.9)	377 (24.6)	1,180 (29.1)	495 (32.3)	34 (0.8)	19 (1.2)	425 (10.5)	173 (11.3)	2,650 (65.3)	1,064 (69.5)
代	2 (0.0)	—	51 (1.3)	12 (0.8)	—	—	1 (0.0)	1 (0.1)	54 (1.3)	13 (1.7)
動	—	—	770 (19.0)	272 (17.8)	—	—	108 (2.7)	38 (2.5)	878 (21.7)	310 (20.2)
{一	—	—	770 (19.0)	272 (17.8)	—	—	20 (0.5)	4 (0.3)	790 (19.5)	276 (18.0)
サ	—	—	—	—	—	—	88 (2.2)	34 (2.2)	86 (2.2)	34 (2.2)
形	—	—	120 (3.0)	45 (2.9)	—	—	3 (0.0)	—	123 (3.0)	45 (2.9)
容	—	—	206 (5.1)	66 (4.3)	—	—	14 (0.3)	3 (0.2)	248 (6.0)	76 (4.9)
副	28 (0.6)	7 (0.5)	206 (5.1)	66 (4.3)	—	—	2 (0.0)	1 (0.1)	286 (5.7)	74 (4.8)
{一	28 (0.6)	7 (0.5)	206 (5.1)	66 (4.3)	—	—	2 (0.0)	2 (0.1)	286 (5.7)	74 (4.8)
漢語	—	—	—	—	—	—	12 (0.3)	10 (0.7)	12 (0.3)	2 (0.1)
と	—	—	—	—	—	—	1 (0.0)	1 (0.1)	17 (0.5)	8 (0.5)
に	—	—	16 (0.4)	7 (0.5)	—	—	—	—	—	—
体	—	—	32 (0.8)	14 (0.9)	—	—	—	—	34 (0.8)	14 (0.9)
接	2 (0.0)	2 (0.1)	55 (1.4)	2 (0.1)	—	—	—	—	—	—
統	—	—	—	—	—	—	2 (0.0)	—	57 (1.4)	2 (0.1)
動	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
感	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	1,043 (25.5)	384 (25.1)	2,430 (60.1)	913 (59.6)	34 (0.8)	19 (1.2)	554 (13.5)	216 (14.4)	4,061 (100)	1,532 (100)

( ) 安愚楽鍋は英語の文章を多く含んでいるので、地の文と会話文とを区別して語数を示した。ここで、地の文における語数と会話文における語数との合計が全体における語数に一致していない。これは、同一の語が地の文と会話文と両方に現われた場合、どちらでも1語とカウントされたためである。( )内の比率は、全体は見出し語の総数4,061を100とし、地の文会話文は、それぞれの総数1532, 2985を100とした%である。

第2表 小新聞、交易問答、安愚楽鍋の用語の、同一品詞内における語種別分布の比率

第1表の次数を品詞ごとの合計語数を100とする%に変えたもの。

(1) 小新聞 (2) 交易問答 (3) 安愚楽鍋

	漢和語		混種語		漢和語		漢語		和語		外來語		混種語		計										
	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語									
名詞	43.6	37.9	0.3	13.1	100	45.7	45.7	0.6	7.0	100	37.5	35.0	33.9	45.5	47.1	45.7	1.3	1.7	1.1	15.7	16.2	13.3	100	100	100
〔名代〕	43.5	37.0	0.3	13.0		45.5	42.2	0.6	7.0		37.4	35.0	33.8	43.6	45.0	44.1	1.3	1.7	1.1	15.7	16.1	13.3			
	0.1	0.9	—	0.1		0.2	4.5	—	—		0.1	—	0.1	1.9	1.1	2.6	—	—	—	0.0	0.1	0.0			
動詞	—	32.0	—	13.0	100	—	22.8	—	7.2	100	—	—	—	37.8	37.7	33.8	—	—	—	12.2	12.3	11.2	100	100	100
〔一サ〕	—	32.0	—	0.7		—	22.8	—	0.3		—	—	—	37.8	37.7	33.8	—	—	—	2.2	1.3	2.8			
	—	—	—	17.3		—	—	—	6.4		—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.0	11.0	8.4			
形容詞	—	21.0	—	9.0	100	—	100	—	—	100	—	—	—	27.6	100	93.6	—	—	—	2.4	—	3.3	100	100	100
副詞	13.4	31.2	—	5.5	100	10.6	73.8	—	10.6	100	11.3	9.2	11.1	33.1	35.3	33.4	—	—	—	5.6	3.9	5.4	100	100	100
〔一漢〕	13.4	31.2	—	1.0		10.5	73.8	—	4.4		11.3	9.2	11.1	33.1	33.3	33.4	—	—	—	0.6	1.3	0.5			
	—	—	—	4.5		—	—	—	6.2		—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.8	2.6	4.9			
連体詞	40.0	35.7	—	3.3	100	—	100	—	—	100	—	—	94.1	37.5	100	—	—	—	5.9	12.5	—	100	100	100	
接続詞	3.0	27.0	—	—	100	4.4	35.6	—	—	100	5.9	—	8.0	94.1	100	92.0	—	—	—	—	—	—	100	100	100
感動詞	—	27.8	—	2.2	100	—	100	—	—	100	—	—	96.5	100	96.5	—	—	—	3.5	—	3.5	100	100	100	

第3表

小新聞, 交易問答, 安愚楽鍋の用語の, 同一語種内における品詞別分布の比率

第1表の次数を語種ごとの合計語数を100とする%に変えたもの。

	(1) 小新聞				(2) 交易問答				(3) 安愚楽鍋									
	漢語	和語	外来語	混種語	漢語	和語	外来語	混種語	漢語	和語	外来語	混種語						
	全	地	会	地	全	地	会	地	全	地	会	地						
名詞	97.0	46.7	100	63.0	94.5	36.6	100	53.9	97.1	98.2	96.6	50.6	55.5	49.6	100	76.9	80.6	74.4
{ 名詞	96.8	45.7	100	62.9	94.1	33.1	100	53.9	96.9	98.2	96.4	48.6	54.2	45.9	100	76.7	80.1	74.1
{ 代名詞	0.2	1.0	—	0.1	0.4	3.5	—	—	0.2	—	0.2	2.0	1.3	2.7	—	0.2	0.5	0.3
動詞	—	37.3	—	32.5	—	35.2	—	27.0	—	—	—	31.7	29.8	32.5	—	19.5	17.6	21.2
{ 一般	—	37.3	—	1.2	—	35.2	—	3.2	—	—	—	31.7	29.8	32.5	—	3.6	1.9	5.3
{ + 変	—	—	—	31.3	—	—	—	23.8	—	—	—	—	—	—	—	15.9	15.7	15.9
形容詞	—	4.5	—	1.8	—	8.1	—	—	—	—	—	4.9	4.9	4.6	—	0.5	—	0.8
副詞	2.5	9.3	—	2.5	5.1	14.4	—	19.1	2.7	1.8	3.0	8.5	7.2	9.3	—	2.6	1.4	3.1
{ 一般	2.5	9.3	—	0.5	5.1	14.4	—	8.0	2.7	1.8	3.0	8.5	7.2	9.3	—	0.4	0.5	0.3
{ 漢 + 漢 + }	—	—	—	2.0	—	—	—	11.1	—	—	—	—	—	—	—	2.2	0.9	2.8
連体詞	0.5	0.4	—	0.1	—	1.4	—	—	—	—	—	0.7	0.8	0.9	—	0.2	0.5	—
接続詞	0.0	0.8	—	—	0.4	3.5	—	—	0.2	—	0.2	1.3	1.5	1.2	—	—	—	—
感動詞	—	1.0	—	0.1	—	0.8	—	—	—	—	—	2.3	0.2	3.0	—	0.4	—	0.5
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100



「本意<ナイ>」「自然<ト>」の<>のない部分)。今かりに、混種語がすべてこのような和語の接辞との結合から成り立っていると考えると、混種語を漢語に加えても、なお、和語の方が多い。つまり和語がたいへん多いということが三者に共通していえることである。

ところで、郵便報知新聞（明治10～11年1年分のサンプリング調査。硬軟いづれの文体も含み、インテリ層を読者対象としている）の語彙調査から得た見出し語全体についての語種別分布を見ると、漢語54.4%、和語25.4%、混種語14.5%、外来語1.3%となっている。ここでは、漢語の数が和語よりずっと多くなっており、軟文体のものとは逆の関係になっている。ついでに述べるなら、この郵便報知新聞の使用度数10以上の語について調査した結果では、漢語43%に対して、和語50%の割合になっている。このことから、使用率の高い語では、和語の占める率が多いこと、漢語は見出し語の数は多いが、一語一語の使用度数は高くない傾向を持っていることがわかる。

なお、混種語の割合は、小新聞と安愚楽鍋は割合としては同じ13.5%だが、小新聞に漢語サ変動詞の多いことに一応注目したい。

第一表を段ごとに（横に）見ていって、他とかなり違っていると考えられる点のいくつかをあげてみる。

まず名詞であるが、小新聞だけが漢語の割合が和語より多い。つぎに、小新聞は他の二つの資料に見られない漢語の連体詞を12含んでいる（旧、昨、前、当、同、本、満、明、明後、翌、来、故）。これら連体詞は、どれも新聞記事には必要な用語と考えられるものであるが、これらの語は、主として漢語名詞を修飾するものである。そして、ある程度の硬さを予想させるものである。また、さきにも述べたように漢語サ変動詞が多い。このようなところから、小新聞は他の二つの資料とやや違った傾向をもっていると考えられるのである。

第2表は、各品詞の中における語種別の割合をみていったものである。ある品詞の総数を100とした場合の各語種の占める比率が示してある。

第3表は、各語種の中における品詞別の割合をみていったものである。ある語種の総数を100とした場合の各品詞の占める比率が示してある。この表は、縦に見ていくものである。混種語のうち、小新聞で漢語サ変動詞の占める比率

が多いことが、かなりはっきり出ている。

軟文体の三つの資料について、漢語の見出し語の量に焦点をあてて見ていくと新聞、問答体、戯作と多少の幅はありながらも、漢語の種類が和語の種類より少ないという共通の傾向があるといえるのではなからうか。今後硬文体の語種調査との対比において、軟文体の漢語の位置がはっきりしてくると思う。しかし、それにしても、使用度数の高い語における漢語和語の関係の調査、さらに、全部の語の使用度数を考慮に入れた量的な調査をしなければ、漢語和語の使われかたを明らかにしたとはいえない。それらは今後に残されている。

#### D. ルビの調査

さきに、郵便報知新聞の用語や、小新聞の用語については、表記の面からの考察を行なっている（⇒年報9の125ページ以下、年報12の104ページ以下、報告15の253ページ以下）。表記法の研究の一環として、今年度は特にルビについて、これまでに扱った文献全部にわたって調査した。

新しい時代に対応して、おびただしく、新聞、雑誌、単行本が刊行されたがこれらを用字や表記の面から考察するときは、現代のやりかたと違ったもの、あるいは現代、習慣的になったもので、この時代に発生を見たものなど、かなりこの時代の特色が見られることは、すでに報告したところである。ルビについては、大新聞と小新聞のルビの相違について、年報12（106ページ）に報告してあるが、なお広く他の文献を見ると、書き手の階層とか教養（例えば、学者であるか、戯作者であるか）、予想される読み手への配慮などによって、ルビの働きがさまざまであることがわかる。今回は、こういった観点に立って、ルビの考察を行なうことにした。

まず、いままで目を通してきた諸文献にあらわれたルビの働きを分類すると、つぎのようになる。

I 本文の漢字のよみや意味をあらわすもの（補助的な使われ方）。

1. 漢字の音や訓をあらわすもの（音訳語を含む）。

(例) ばつくん 抜群, ちれう 治療, ゆきがたし 行方知れず, ごほんだな 御本店, イタリヤ 以太利, アルカリ 亜兒加里

2. 漢語の意味をあらわすもの。

(例) 勤<sup>ホネオリ</sup>勞, 希<sup>コノミ</sup>望, 消<sup>ツカヒツブシ</sup>塵, (鐵道ノ) 主<sup>バンドウ</sup>事

3. 原語をあらわすもの。

(例) 円筒<sup>シリンドル</sup>, 領事官<sup>ニゼント</sup>, 会社<sup>コンパニー</sup>, 為替座<sup>バンク</sup>

4. 漢字の右側のルビがよみをあらわし、左側のルビが意味をあらわす、またその逆のもの。

(例) 生<sup>すぎはひ</sup>産<sup>キ</sup>, 将<sup>せうらい</sup>来<sup>キ</sup>, 循<sup>じゆんかん</sup>環<sup>カウテイ</sup>, 昂<sup>ゴウ</sup>低<sup>ゲイ</sup>する

II ルビが本文のよみの本流となるもの（本文の漢字のほうが補助的に使われている）。この中には漢字とルビがかなり習慣的に固定したものが見られる。

(例) 吃<sup>びつくり</sup>驚<sup>あふない</sup>, 浮<sup>あ</sup>雲<sup>る</sup>, 歩<sup>く</sup>行<sup>ら</sup>く, 活<sup>ひきたて</sup>計<sup>て</sup>す, お拘<sup>おちぶれ</sup>引<sup>ばん</sup>になる, 零<sup>ばん</sup>落<sup>お</sup>た, 蒸<sup>ばん</sup>餅<sup>お</sup>, 唧<sup>お</sup>筒<sup>お</sup>

III ルビが本文の漢字の意味をあらわしており、文脈としては、ルビも無理なくよみ下せるもの。

(例) 洋<sup>せいやうよう</sup>式<sup>しき</sup> (に御<sup>おんごら</sup>建<sup>お</sup>築<sup>きとし</sup>になり), 懇<sup>かん</sup>篤<sup>とく</sup>に御<sup>おん</sup>説<sup>せ</sup>諭<sup>ごん</sup>になり, (不<sup>ふ</sup>義<sup>ぎ</sup>理<sup>り</sup>な) 負<sup>かり</sup>債<sup>せ</sup> (を訴<sup>を</sup>へられ)

読みやすさということを特に配慮した文献でも、婦女子を読者対象にした読みものと、学術啓蒙書の類とでは、おのずとルビが違った働きをしている。また文学的な文献には、中国文学の影響といわれる、例えば「閑話休題」といったようなルビが見られる。また、この時代、急激に増加した新造漢語、訳語を読み手に理解させるための手段としても、ルビは活用されている。

上記の分類に見られる諸現象の根底には、当時の人々の文字やことばに対する特有の意識が横たわっているだろう。その方面の事情まで研究するには、いままでに扱ってきた資料のほか、なにがしかの文献を資料として用いる必要があるので、調査は本年内に完了できなかった。くわしい報告は次年度にゆずる。

## E. 次年度調査への見通し

次年度以後にすべきことは次のとおりである。

- (1) 総合語彙カードの記入を完了して、いろいろな観点から集計記述する。
- (2) 語の意味・用法の記述にとりかかる。
- (3) 文献の文体上の特徴を基準にして、語彙論的に分析する。(主として意味分類と語種別・品詞別の分類とから)
- (4) 語の表記や文章の記載法を調査する。

(林 四郎)

# 古辞書の索引作成

## A. 仕事のあらまし

研究所には、昭和25年度に委託研究として作成した『色葉字類抄』（三巻本）の索引カードがある。（「年報2」参照）

その後担当者の無いまま、整理せずにあったが、古代語研究室開設準備室の初めての仕事として、この索引を利用できるようにすることにした。

この索引カードは、字や語に付けてある読みの索引と、漢字の部分けによるものを主とする索引を作るように考えて作成してある。したがって、整理するについても、その採集の時の計画の範囲を大きく出ることにはできないわけである。

本年度は、つぎの作業を行なった。

### 1. 『色葉字類抄』の五十音順索引

- (1) 採集ずみのカードの検査
- (2) 補充採集

前田本は、全三巻のうち、中巻が欠けている。その欠けている中巻は黒川本によって補ってある。しかし、揃っている上・下巻のうちでも<ユ>の最後部分と、<メ>・<ミ>の全部、<シ>の前半部分が欠けているので、黒川本でその12丁を補った。

- (3) 五十音順に排列

### 2. 古辞書資料の収集

『世俗字類抄』（天理図書館蔵）を写真によって複写した。

古辞書の主なものの多くは複製されているが、零本であったり、周辺のものの中には忘れられているものもある。

この『世俗字類抄』もその一つであって、当面の『色葉字類抄』とはひじょうに近い関係にある。

所蔵者の好意によって写真によって複写することができた。

フィルムで保管しておくと同時に、筆写して利用できる形にしておきたいと思っている。

## B. 索引作成についての問題

索引がまったく個人の利用の為にだけ作られる場合には、何か特定の必要があるのだから、その必要に合わせて作ればよい。しかし、研究所の仕事として作るとなれば、無目的であるわけではないが、ある程度広い目的に耐えるように作らなければならない。そこに、多くの問題が出て来る。

たとえば、漢語の扱いである。いわゆる字音仮名づかいで、同字の表記についてさえ二種あるとあっては、その処理に当惑したからか、五十音順の索引の和語だけのものも見えるようである。仮名づかいの研究の為に主な目的として索引を作るなら、おのずから問題は別であるが、ある語や文字が登録されていたかどうかを調べようというなら、読みの表記にそれほどかかずらうことはないとの結論も出て来よう。

以下、この索引の問題点とその処理の結果を示す。（印刷のつごうから、本来縦書きであるものを横書きにしてある）。

### (1) 読みの欠けているもの

黒<sup>カ</sup>蝦<sup>ハ</sup>墓<sup>ツチ</sup>ツチカヘル 賀<sup>カ</sup>茂<sup>モ</sup> 柱<sup>ツ</sup>礎<sup>ソ</sup> 討<sup>ト</sup>論<sup>ロ</sup>

このような例は、倭名抄、名義抄を援用せずとも、その欠けている部分を補うことは容易である。しかし、補うとなれば、できる限りというよりも、全てにわたってしなければならぬことになる。その努力を惜しむのではないが、以下の理由から、欠けた部分は補わず読みのついでに字だけを取り上げることにした。

極言すれば、研究者がこの『色葉字類抄』を利用する場合、語を探すなら、五十音順の部分けに従えば、大体の見当をつけることはできよう。しかし、文字となるとそうはいかない。そこに、漢字索引の必要性和重要性とがある。

欠けた部分を補わなかったというのも、後に作る漢字索引と相まっての利用を期待することで、足らざるを補なおうと考えているからである。

### (2) 熟語の字についた読み

イカタイカタ フハツ フンクワイ アクタ ハルタラ ハナルトモヲ  
 桴筏 フハツ 蕘堆 アクタ 壑田メウテン 放儻ハウタウ

一方では、<無頼タヨリナシ>という例もある。この両者を合わせみれば、疊字門では、語についた読みと、文字についた読みの二者が入りまじっていることがわかる。それを同列に扱うには何か問題があるかもしれないが、それは、『色葉字類抄』の研究にとって大切な事であって、収録している語としては同じ扱いをしてもよいであろう。だからと言って、<ハルタラ>というものの形を、<タラハル>に直おそうというのではない。また、少し不自然ではあるが、<イ>の部には、<イカタイカタ>と出しておく。

(3) 濁音符のついているもの

梵行<sup>ト</sup>ホンキヤウ 鶯<sup>ト</sup>ヲソキムマ

前田本には、朱で音符をつけてある。

この音符は、当時の発音を示すものとして信頼してよい。しかし、この作業は、複製本を底本として行なっている為に、判別がむずかしい時がある。例えば、墨の上に打ってある時、虫食いか否かの疑いがある場合などである。

そこで、原カードにはできる限り忠実に転写するが、索引の排列に当っては、濁音符は考慮しないことにした。

(4) 漢字音の扱い

押書<sup>フ</sup>フシヨ 鑽<sup>ツ</sup>ツツ 囚<sup>シ</sup>シウシ 高才<sup>カウサイ</sup>

このように格に合っているものが大部分ではあるが、中には、

{ 雑仕 <sup>ツ</sup> ツシ	{ 脣吻 <sup>シムフツ</sup>	{ 執着 <sup>シツチヤク</sup>	{ 合眼 <sup>カウカン</sup>
{ 雑袍 <sup>ツフハツ</sup>	{ 齶脣 <sup>ケンスケン</sup>	{ 執柄 <sup>シツヘイ</sup>	{ 合カフ

といった混乱も見受けられる。

これも、この項(1)と同じ理由で、原表記に従って排列することにした。

(5) 誤りの扱い

イ) 字形

{ 巫覡 <sup>ラムナカウナキ</sup>	{ 倒	整 <sup>セン</sup> ...
{ 巫覡	{ 倒	

この例は、筆者がその誤りに気付いて訂正している例である。

これらは、その訂正されている方によって処理することにした。

一方、

率堵婆ソトハ 軒ケン

などは、明らかに間違った字形である。今は、読みの五十音順索引の作成が目的なのであるから、字形を「マヽ」の形で掲げておいてもさしつかえないと考えた。

ロ) 仮名づかひの扱い

愚ヲホカナリ 祖オホオチ 弟ヲトオト 威ヲトス

といったように、定家仮名づかひをもとにしたという、仮名づかひに従えば、<オ>と<ヲ>の混同は多い。便宜的な方法をとるなら、一括して<オ>の部に入れておくことになる。

しかし、この混同は、大野晋氏によれば、当時のアクセントを示すものであるという<sup>注</sup>。しかし、確たる根拠があるので、混乱などではないといっても、特定の人以外にとっては検索の為には不便である。かといって、この索引の根本方針とした、原表記を尊重する、という態度を、ここに適用しては、かえって混乱を招く結果になろう。

こう考えて、一応、<オ>と<ヲ>を一括して入れておいた。

さらに、字音仮名づかひが問題になる。

この扱いは、(4)と同じ。

(6) その他

イ) 読みの付いていないもの

(1)の項と同じ扱いで、読みを付けることをせず、その語が属している部分けによって分類しておく。

ロ) 仮名字体

前田本の方には約13の古体の仮名字体を使っているが、すべて現行の字体に改めて処理する。

---

注 大野晋「仮名遣の起源について」(国語と国文学27-12)



### C. 今後の仕事

前述したとおり，このような体裁の五十音順索引であるからは，漢字索引と相まってはじめて十全のものとなるのである。

来年度は，漢字索引を作る仕事を考えている。

### D. 担 当 者

この索引作成の担当者は，山田巖，広浜文雄の2名である。（山田，広浜）

# 類義語の調査研究

## A. 調査研究の目的

第一資料研究室では、本年度から3カ年計画で、類義語の調査研究を始めた。

国語には、たとえば、たまな（球菜）・かんらん（甘藍）・キャベツ、めし・ごはん・ライスのように、ほとんど同じ事物と考えられるものに対して、いくつもの名称が与えられ、またそれが固有の語ばかりでなく、漢語・外来語にわたっている場合がある。このような語は類義語と認められる。類義語は、それが使われる場面の違いや微妙なニュアンスの違いを表わす必要から生まれてくるものであるから、たくさんの類義語が使われているということは、社会生活を営むためには、それが必要だと認められているからにほかならない。たくさんの類義語があるということは、ものごとを詳しく、細かに区別し、表現するに役だつから、国語の表現力を豊かにするという点で歓迎すべきことであろう。しかし、その反面に、社会のきわめて狭い領域だけで使われている語を不用意に社会全般の通行語としておし広めたり、あるいは、社会生活を営む上からは、無視してもよいような微差に執着したりすると、類義語の多様性が、かえって理解を妨げる結果を生むことになる。もし、このような現象が広くマスコミの面で見受けられるとしたならば、このことが、社会生活を円滑に運営するためには障害を与えるであろう。

このことに対し、われわれは、次のような点に問題があると予測する。

(1) 外来語をめぐる類義語の問題

(2) 同音類義語に関する問題

(3) 地方新聞・地方放送などに現われる、全国共通語と誤認されている方言に関する問題

(1)は、最近のマスコミにおける外来語のはんらんが、在来の類似の意味の語との間に類義関係を生じ、その使い分けの存否に関して種々の混乱をひき起こし

ている現象をさす。

(例) ショッピング：買い物 レジャー：余暇：ひま

(2)は、同音類義語における使い分けの存否が、表現・理解を妨げる結果を生む。

(例) 温和：穏和 生育：成育 特徴：特長 皮：革

(3)は、特殊な場合であるが、次のような事象を予想することができる。ある程度広い地域に行なわれる方言が、なんらかの理由で、その地域で発行されている新聞や地方放送に現われることがある。もし視聴者が、新聞・放送の用語は全国共通語を用いるものという理解のもとにこれに接するならば、その方言が、その地域内の共通語的性格をもっているだけに、これが全国共通語と誤認され、またこの方言的言いかたと全国共通語の言いかたとの間に類義語関係を生じることになる。ことに、ラジオ・テレビの場合、全国に中継され、また新聞では地方のニュースが紙型で中央に送られて、そのまま印刷されるというような場合には、理解に支障をきたす可能性が生まれる。このような現象が実際にどの程度起こっているであろうか。

(例) さつまいも を からいも (九州地方)

七輪 を かんてき (京阪地方)

以上のような課題に対し、問題のあり方をさぐり、できれば、これに対する処理方法を考察しようとする。

## B. 資 料

資料として参考しうる文献には次のようなものがある。

- (1) 総合雑誌の用語 (国立国語研究所報告12・13)
- (2) 婦人雑誌の用語 (国立国語研究所報告5)
- (3) 各種週刊誌
- (4) 新聞・放送関係の用語集・言いかえ集
- (5) 同音語資料カード (国研報告20「同音語の研究」のための資料)

このうち、(3)は、週刊誌が、新しい社会事象の発生、社会各層の好みなどを敏感に反映していると思われ、したがって、各種辞書類に登録されていない語、

あるいは新奇な表現が現われる可能性が多いと予想される。特に、課題(1)の外來語をめぐる類義語のための資料が得られる期待がある。また、(5)は、課題(2)の同音類義語のための根本資料となるものである。

### C. 計画のあらまし

このような問題点がどのようなかたちで現実に見われているかをさぐるためには、あらかじめ、類義語とはどういうものかということを知っておかなければならない。しかし、この問題は、実に、意味論の中核をなす根本問題であって、しかも、現在ようやく研究の緒についたばかりの領域である。この現状に対して、われわれがまずなすべきことは、この問題の理論的な考究ではなくして、現象面に即して、しばらく作業のための仮説をたて、これを検討してゆくことによって、類義語というもののおおよその範囲をくぎってみることではないかと思う。

まず、われわれは、ある語群を類義語と認めるか否かを判定する基準として次の二つの条件を考えた。

二つ以上の語が、その主要な意味において、

- (1) さしているものが同一か、または同一に近いか。
- (2) さし方・とらえ方が著しく違わないか。

この条件にかなうものを類義語と認めた場合、次に、そのような類義語が現在の社会でどのような姿で存在しているかを、現象面に即して調べることが必要な作業となる。そのために、われわれは、次の二つの面から考察してみようとする。

- (1) 類義語の種々相の概観
- (2) 類義語が新たに発生するための条件の追求

いくつかの語が、たがいに類義関係にあるということは、それらの語の意味が、全く同一なのではなく、ほとんど重なり合う部分と、それぞれの語が独自にもっている部分があるということである。類義語は、それぞれの語が独自にもっている部分の種々の様態によって特徴づけられることになる。したがって、(1)の類義語の種々相の概観とは、重なり合い方の広狭・濃淡の度合いの種

々相を調査することをめざしている。しかし、その種々相を一々数え立てれば、ほとんど無限に広がることであろうから、限られた時間と人員では、その大要を調べるにとどめるほかない。そのためには、類義語がどういう点でたがいに違いを示すかという観点にたち、その違いを次の四つの点を手がかりとしてとらえてみようとする。

- (イ) 語の意味内容………語の中核をなす意味と副次的な意味（たとえば語感など）
- (ロ) 語の形態………それぞれの語が同音語をもつか否か、表記形など。
- (ハ) 語の文法機能・品詞性など。
- (ニ) 語の存在様式………使用分野、複合語・慣用句を作る力があるか否かなど。

このようにして、類義語にいくつかの類をたてることができるであろう。

(2)の「類義語が新たに発生するための条件の追求」は、問題点の発見およびその分析のために用意されたものである。ここでは、類義語を生む条件として、(イ)社会的、(ロ)地域的、(ハ)時代的、(ニ)生理的、(ホ)心理的、(ヘ)言語的、等の諸点を想定して観察し、類義語の発生する姿を類型的につかみ、さらに、それらの条件のうち、特に有力に働いている要因を分析することによって、類義語の問題点が解明されることをめざしている。

このような考察は、前述した資料から得た使用例に基づいて行なうが、資料の制約で、具体的な文脈の得られない場合が多いので、それらについては適宜文脈を想定することにする。

以上の計画のうち、本年度は第1年度として、資料の収集につとめた。

#### (1) 外来語資料の収集

昭和36年6月以降1年間の週刊誌のうちから13種を選定し、そこに現われた外来語のすべてにしるしをつける作業、次にぬき出された外来語のうち、他に類義語をもつと思われるものを選び分ける作業を行なった。週刊誌に現われる外来語には、たとえば、「イタリアンカットのレインブーツ」のように、語の形で他にこれと類義関係になるものを見いだし得ないものがある。この類は、外来語のはんらんという現象を観察する立場から

みれば、重要な資料であるが、類義語という観点からみれば、第1次資料とは考えられない。なお、週刊誌13種は次のとおり。選定にあたっては、ある特徴をもつものだけにかたよらないように心掛けた。

週刊朝日 週刊読売 サンデー毎日 週刊サンケイ 朝日ジャーナル  
週刊女性 週刊文春 週刊新潮 週刊現代 週刊明星 アサヒ芸能  
週刊実話 読売スポーツ

## (2) 同音類義語資料の収集

「同音語の研究」のため資料として、「同音語・類音語集」（衆議院速記者養成所刊）を中心に各種用語集・辞書等から得た同音語の資料カード（概数12,000組、48,000語）が作ってあるので、この中から同音類義語（約2,600組、7,000語）の資料をぬき出し、われわれの要求をほぼ満たす資料を得ることができた。

この、外来語および同音類義語の資料を基礎とし、これに対する類義語を考えるという方法で順次資料の拡充をはかった。そのための資料として、前述した総合雑誌・婦人雑誌の用語あるいは各種用語集・言いかえ集等を利用した。類義語は、その様相が複雑であるから、第2年度以降分析の過程にも、このような方法で資料を補う必要が起こってくるであろうと思われる。

## D. 担 当 者

本年度の研究計画の立案・資料の収集には、松尾拾、西尾寅弥、田中章夫の3名すべてがあたり、研究補助員露峰裕子が作業を助けた。（松尾）

## 国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和36年1月—12月の刊行の図書・雑誌・新聞についての文献調査を行なった。以下、その各々について分類し、冊数および点数をみていくことにする。

### A. 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著(編)者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べ、カード化し、総数 332冊の分類目録を作成した。この目録カードは、下記の雑誌論文の目録とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和37年版）に掲載されている。

#### 1. 刊行書の分類とその冊数

国語一般・国語史	24	書く・作文指導	16
ことばと機械	1	文法	3
音声・音韻	5	特殊教育	3
文字・表記	9	言語技術	27
語彙・用語	10	言語学・その他	28
文法	2	言語学一般	15
文章・文体	28	外国語教育	3
方言・民俗	22	外国人の日本語学習	10
国語国字問題	14	マス・コミュニケーション	15
国語教育	66	辞典・用語集	47
国語教育一般	10	資料	35
学習指導一般	19		
話す・聞く	2	合計	332冊
読む・読書指導	13	追捕（前年度出版のもの）	32

## B. 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者・誌名・発行年月・巻号数およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。採録した論文・記事の総数は 2,698 点に達した。

### 1. 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告書類の種別数

#### a 一般刊行雑誌（学会誌も含む）…… 217種

国語・国文（言語ほかを含む）	96	週刊誌	1
方言・民俗	7	総合誌	3
国語問題	12	詩歌・芸術	10
国語教育	40	出版・PR	6
新聞・放送	11	その他	28
外国語関係	3		

#### b 大学・研究所等の紀要・報告類……91種

なお，調査した刊行物は，研究所に寄贈された分（後記，「昭和36年度に寄贈された図書」の一覧(2)「逐次刊行物の部」参照）と，当所購入による下記の諸雑誌である。

計量国語学（計量国語学会）	教育（国土社）
国文学解釈と鑑賞（至文堂）	教育心理（日本文化科学社）
文学（岩波書店）	児童心理（金子書房）
国語と国文学（東大国語国文学会）	社会学評論（日本社会学会）
NHK放送文化（日本放送協会）	沖縄文化（沖縄文化協会）
国文学言語と文芸（明治書院）	週刊朝日（朝日新聞社）
文学・語学（三省堂）	学術月報（日本学術振興会）
英語青年（研究社）	その他国語関係論文の載った諸誌(略)

### 2. 論文・記事の分類とその点数

<b>国語学</b>	<u>122</u>	<b>国語史</b>	<u>48</u>
国語学一般	20	国語史一般	21
意味	7	訓点と訓読語	27
言語生活	16	<b>音声・音韻</b>	<u>74</u>
話しことば	14	音声・音韻一般	25
ことばに関する随筆	55	史的研究	28
ことばと機械	10		



アクセント・イントネーション	21	和泉式部日記	7
<b>文字</b>	<b>32</b>	栄花物語	4
文字・活字	13	大鏡	2
表記	19	西鶴	3
		その他	26
<b>語彙</b>	<b>128</b>	<b>国語問題</b>	<b>278</b>
語彙一般	20	国語問題一般	168
古語	36	表記の問題	
現代語	17	表記法	13
各種用語	7	当用漢字など	25
流行語・新語	4	かなづかい	23
外来語	6	送りがな	1
地名・人名	8	わかち書き	11
辞書・索引	30	かな書き	13
		よこ書き・たて書き	3
<b>文法</b>	<b>154</b>	地名・人名の表記	11
文法上の諸問題（現代語法）	67	ローマ字の問題	10
文法の史的研究	55	<b>国語教育</b>	<b>1,243</b>
敬語	32	国語教育一般	128
<b>文体</b>	<b>128</b>	国語教育史	30
文体・表現	68	学習指導一般	222
江戸時代以前	29	（ドリル学習）	5
明治以後	26	（学習ノート）	2
翻訳の問題	5	ことばの指導	12
<b>方言</b>	<b>94</b>	話す・聞く	48
方言と標準語	21	（聞く）	10
各地の方言		（話す）	7
東部地方（北海・東北・関東・		読む・書く	6
東海・東山）	24	読むこと	136
西部地方（中部・近畿・中国・		（読書指導）	30
四国）	32	作文指導	178
九州・琉球地方	17	文字指導	39
<b>古典の注釈</b>	<b>116</b>	表記の指導	3
古典の注釈一般	3	語彙指導	26
万葉集	24	文法教育	55
大和物語	3	文学教育	74
かげろう日記	8	古典教育	42
源氏物語	26	漢文教育	19
枕草子	10	学力評価	41
		国語教科書・教材研究	66

特殊教育	10	マス・コミュニケーションの問題	6
幼児教育	20	新聞	7
ローマ字教育	21	放送	22
視聴覚教育	9	テレビ	6
日本語教育	4	宣伝	32
<b>言語学</b>	<b>64</b>	<b>書評・紹介</b>	<b>132</b>
言語一般	23	<b>国語資料</b>	<b>12</b>
外国語研究	20		
外国語教育	6		
外人の日本語研究	2		
問題の紹介	13		
<b>マス・コミュニケーション</b>	<b>73</b>		
		合計	2,698点
		<b>追補</b>	<b>86</b>

### C. 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜き、それを整理し製本して閲覧に供するとともに、分類別のカード目録を作った。カードの記載形式は、見出し語・(欄名だけで、見出し語のないものは、その内容によって、適宜題名をつけた。)紙名・筆署名・年月日・欄名・行数・内容の順序によった。切り抜き総数は1,923点である。調査した紙名、切り抜き数、および月別の切り抜き数は次のようである。

#### 1. 新聞の種類と切り抜き数

<b>日・夕刊紙</b>		(大阪)	3点
朝日	318点	日本経済	74
(大阪その他)※	32	中部日本	131
毎日	289	<b>特殊新聞</b>	
(大阪)	17	読書	35
読売	279	読書人	63
(大阪)	27	図書	48
東京	261	新聞協会報	38
東京タイムズ	47	その他	44
産経	217		

※ かつこの中は地方出版のもの。これは、大阪の山田房一氏、名古屋の平岡伴一氏などの地方在住のかたがたから、関係記事のあるごとに恵送されたもの。

#### 2. 月別の切り抜き数

1月	165	7月	143
2月	161	8月	126
3月	240	9月	144
4月	178	10月	164
5月	178	11月	143
6月	168	12月	113

計 1,923点

### 3. 記事の分類とその点数

<b>国語(学)</b>	<u>307</u>	表記一般	15
国語一般	46	当用漢字など	59
言語生活一般	80	かなづかい	7
話しことば	148	送りがな	6
ことばと機械	33	かな書き	5
<b>国語史</b>	<u>2</u>	文体・筆順	12
<b>音声・音韻</b>	<u>22</u>	よこ書き・たて書き	12
<b>文字</b>		略語・略称	8
文字・表記	<u>18</u>	地名・人名の表記	23
<b>語彙</b>	<u>336</u>	外来語表記	25
語彙一般	175	敬語の問題	21
各種用語	32	<b>国語教育</b>	<u>119</u>
新語・流行語・隠語	64	国語教育一般	14
外国語・外来語	61	学習指導の問題	
辞書	4	学習指導一般	8
<b>文法</b>	<u>5</u>	話す(聞く)	8
<b>文体</b>	<u>130</u>	読む(読書指導を含む)	18
文体・表現	90	書く(作文指導を含む)	10
翻訳の問題	40	国語の学力テスト	13
<b>方言</b>	<u>66</u>	国語の教科書	7
方言一般	40	文学・古典教育	2
各地の方言	26	特殊教育	20
<b>国語問題</b>	<u>641</u>	視聴覚教育	5
国語問題一般	448	幼児語教育	8
表記の問題		ローマ字教育	6
		<b>言語学</b>	<u>89</u>
		言語一般	5
		外国語一般	14
		外国語研究	16
		外国語教育	16

問題の紹介	21	テレビ	5
外国人の日本語学習	17	宣伝・広告	19
マス・コミュニケーション	52	書評・紹介	136
マス・コミー一般	3		
新聞	13		
放送	12		
		合計	1,923

ちなみに、国語問題については、昨年度に比べて、本年度の点数が特に多くなっている。雑誌論文で本年度 278点、昨年度 203点で75点の増加、新聞記事で本年度 641点、昨年度 379点で 262点の増加をしている。

これは、昭和36年3月22日、文部省で開かれた第42回国語審議会総会の席で、第6期審議会委員の推薦方法をめぐって審議会内部の意見が対立し、委員5氏が退場するというできごとがあった。その後（昭和36年10月25日に新しい第6期委員45氏が推薦されたが）、国語問題一般、漢字の問題、ならびに国語審議会関係の問題がジャーナリズムを賑わした。それが影響を与えたものとみられる。

#### D. 担 当 者

この調査には、村尾力（9月20日まで）、飯豊毅一（2月1日から）、大久保愛が主としてあたり、研究補助員小山孝子が作業を助けた。（飯豊・大久保）

## 図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究活動に必要な研究文献・言語資料などを収集し、管理した。収集の方針、整理の方法など、従来とほとんど変わらない。また、例年と変わらず、各方面から図書の寄贈を受けた。（下掲一覧表のとおり）

昭和36年度に新しく加えた図書の数は、次のとおりである。

単行本	購入	668冊
	寄贈	122冊
雑誌	購入	1246冊
	寄贈	905冊
新聞	購入	15種
	寄贈	2種

年度末の蔵書数（単行本のみ）は、27,164冊である。（大石）

### 昭和36年度に寄贈された図書の一覧

- | 寄贈者名（敬称略）    | 図書名  |
|--------------|--|
| 1 単行本        | （ ）内は編著者が寄贈者と異なる場合の編著者名。* は抜刷。               |
| 愛甲勝矢         | 「職業配分の理論」                                    |
| 井沢隆俊         | 「本川根方言考」                                     |
| 今井文男         | 「表現学仮説」（龍二山房）                                |
| 岩波書店         | 「岩波講座、現代教育学」1～18巻                            |
| 宇都宮市立教育研究所   | 「書く力を高めるための指導の研究」                            |
| 大阪大学図書館      | 「大阪大学図書目録」                                   |
| 奥村三雄         | 「漢語のアクセント」「呉音の声調について」「アクセントとアクセント<br>研究の意義」* |
| 学燈社          | 「新指導要領による高等学校国語教育実践講座」3                      |
| 川上夔          | 「言葉の切れ目と音調」*「日本語の単語および連語の音調」                 |
| 九学会連合佐渡調査委員会 | 「佐渡関係文献目録」（昭和36年3月）                          |
| 京都大学国文学会     | 「全浙兵制考、日本風土記」                                |
| 金田一春彦        | 「四座講式の研究」                                    |
| 倉田正邦         | 「松阪の方言」（太田一平）                                |

国際文化振興会 “BIBLIOGRAPHY OF STANDARD REFERENCE BOOK FOR JAPANESE STUDIES WITH DESCRIPTIVE NOTE”

コロンビア大学図書館 「新書目録」No. 61, 62

酒井裕 「共通語アクセントの手引き」

史料編纂所 「大日本史料」 2—12, 3—17, 6—33, 8—24, 11—12, 11, 別巻—2, 12—42, 「大日本古文書 家わけ」17, 「同 幕末外国関係文書」31, 「大日本近世史料 諸問屋再興調」3, 「同 市中取締類集」3, 「大日本維新史料 井伊家史料」2, 「大日本古記録 殿暦」1, 「同 梅津政景日記」7, 「同 臥雲日件録抜尤」「同 小右記」2

秘父市教育委員会 「秩父市教職員教育研究報告集」(昭和35年度)

塚原鉄雄 「国語史原論」(塙書房)

天理図書館 「紀行航海記録」「永井荷風集」「古活字本目録」

東京堂 「方言学講座」2~4巻

統計数理研究所国民性調査委員会 「日本人の国民性」(至誠堂)

東洋大学図書館 「東洋大学増加図書目録」4

東洋文化研究所 「新収和漢図書目録」10「アジア地域関係文献速報」11

内閣文庫 「内閣文庫国書分類目録」上

長田久男 「書きことばの文型」(京都市教育研究所)

奈良国立文化財研究所 「平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告」

南山大学図書館 「南山大学雑誌目録」(改訂2版)

西田長寿 「明治時代の新聞と雑誌」(至文堂)

西村澗紹 「天台学僧宗泐の研究」(西来寺)

日本学術振興会 「研究報告集録」〔人文編〕〔社会科学編〕〔機関研究編〕

日本国語教育学会 「小学校・中学校国語科学習指導案」

日本放送協会 「スポーツ辞典」8~11「日本地名発音辞典」3

日本放送文化研究所 「放送用語参考辞典」(昭和36年版)「外国語のカナ表記」1961

日本民間放送連盟 「民間放送主要職員人名簿」(昭和36年後期版)

野地潤家 「国語教育学研究」「国語教育実践の深化過程」

原田幸之進 「文学作品における陳述の構造(1)」\*

美術研究所 「日本美術年鑑」(昭和35年版)

広島大学文学部国語学研究室 「校本干祿字書」

広島県 「山口県に於けるアクセントの分布」\*「広島県に於けるアクセントの分布」\*

福島県教育調査研究所 「学力検査問題の報告書」(その5)「高等学校入学志願者選抜のための学力検査結果の調査報告書」「望ましい学習指導法の実証的研究の報告書」「非行傾向児の早期発見に関する報告書」「全国学力調査結果の報告書」

松本明 「ダマシ雨」\*  
松下史生 「現代表記法概論」  
堀内庸村 「ヒルルスパンニコイ」  
矢野文博 「長恨歌琵琶行訓読考異」\*  
山崎久之 「室町時代の待遇表現の記述的研究」\*  
山田忠雄 「節用集分類目録」  
李錫麟 「新しく区分した日本用言の語幹・語尾」

## 2 逐次刊行物（おもなもの）

愛知学芸大学国語国文学会 「国語国文学報」13, 14  
愛知県教育文化研究所 「研究紀要」17, 18「研究報告」33, 34  
愛知県立女子大学 「説林」8「紀要」11, 12  
青山学院大学英文学会 「英文学思潮」34-1  
秋田大学学芸学部 「研究紀要」11  
あたらしい文字の会 「あたらしい文字」2-4~10, 3-1  
跡見学園 「国語科紀要」9  
明日香社 「明日香」263-274  
いずみ会 「IZUMI」44~52  
茨城大学文理学部 「紀要」12  
愛媛県立教育研究所 「紀要」32  
愛媛国語国文学会 「愛媛国文研究」10  
大分県立教育研究所 「研究報告」20, 21  
大阪学芸大学 「紀要」A-9「学大國文」1~5  
大阪市立大学文学会 「人文研究」12-2~11, 13-1  
大阪大学文学部 「語文」24  
大阪府立大学 「紀要」9  
大谷学会 「大谷学報」40-4, 41-1, 2「研究年報」13  
王朝文学研究会 「王朝文学」6  
お茶の水女子大学 「人文科学紀要」14  
お茶の水女子大学国語国文学会 「国文」15, 16  
お茶の水女子大学附属高等学校教育研究会 「紀要」6  
音の文化研究会「音」7, 9  
尾道短期大学 「研究紀要」11  
解釈学会 「解釈」72, 78  
香川大学学芸学部 「研究報告」1~14  
学習院大学 「国語国文学会誌」5  
学習研究会 「学習研究」150~155  
学燈社 「国文学」6-6~14, 7-1~5

鹿児島大学教育研究所 「研究紀要」12  
鹿児島大学文理学部 「文科報告」1～3, 10  
カナモジカイ 「カナノヒカリ」466～476, 「モジトコトバ」216, 228  
関西学院大学人文学会 「人文論究」12—1～3  
関西学院大学日本文学会 「日本文芸研究」13—1, 2  
関西大学国文学会 「国文学」30～32  
観世会 「観世」28—4～12  
北見ローマ字会 「KITAMI RÔMAZI」17～20  
岐阜大学国語国文学会 「国語国文学」1  
九州大学国文学会 「語文研究」12, 13  
九州大学文学研究会 「文学論輯」8  
九州大学文学部 「文学研究」60 「紀要」(英文)7  
京都学芸大学 「紀要」17～19「国文学会報」8  
京都女子大学国文学会 「女子大國文」21～23  
京都大学音声科学総合研究部会 「音声科学研究」1  
京都大学教育学部 「紀要」7  
京都大学教養部 「人文」8  
京都大学国文学会 「国語国文」318～330  
京都大学人文科学研究所 「紀要」28, 29「調査報告」19「ZINBUN」5  
近代文学研究会 「近代文学研究」7  
宮内庁書陵部 「紀要」12  
熊本女子大学 「學術紀要」13—1  
熊本大学教育学部国文学会 「不知火」13  
熊本大学法文学会 「法文論叢」13  
倉田正邦 「三重県方言」12, 13  
訓点語学会 「訓点語と訓点資料」16～20  
群馬大学 「紀要」10  
言語政策をはなしあう会 「言語政策」3, 4  
甲南女子短期大学 「論叢」5「甲南国文」7～9  
甲南大学文学会 「文学会論集」15  
神戸市外国語大学研究所 「神戸外大論叢」54～58「外国学資料」10～12  
神戸女学院大学 「論集」23, 24  
神戸大学教育学部 「研究集録」25, 26  
神戸大学文学部 「研究」23～25  
語学教育研究所 「語学教育」250～254  
国学院大学 「国学院雑誌」62—2～12, 63—1～3



国学院大学国語研究会 「国語研究」12  
 国語学会 「国語学」44～47  
 国語教室友の会（京都） 「国語教室」16～18  
 国語問題協議会 「会報」3～8  
 国語を愛する会 「日本語」1—1  
 国立教育研究所 「紀要」26～29  
 国立国会図書館 「国際交換通信」51～57「公報」13—2, 3「洋書速報」112～129  
 「古典と現代」の会 「古典と現代」14～16  
 ことばの会・なごや 「ことば」25, 26  
 小林理学研究所 「報告」10—4, 11—1～3  
 駒沢大学 「文学部研究紀要」20  
 埼玉県立教育研究所 「研究紀要」31, 35, 36  
 埼玉大学 「紀要」8・9  
 佐伯古文研究所 「古文研究」1  
 佐賀大学教育学部 「研究論文集」10  
 滋賀県立短期大学 「学術雑誌」2  
 滋賀コトバの会 「みんなのコトバ」7  
 静岡県立教育研修所 「教育研究」11, 12, 14, 15, 17～20  
 静岡大学教育学部 「研究報告」2～7, 11  
 静岡大学教育学部 「文化と教育」130～140  
 静岡大学文理学部 「人文論集」11  
 信濃教育会 「信濃教育」893～903  
 島根大学 「論集」10「山陰文化研究所紀要」1  
 小学館 「総合教育技術」16—1～14, 「幼児と保育」7—1～12, 「小一教育技術」15—1～14「小二教育技術」14—1～14「小三教育技術」15—1～14  
 「小四教育技術」14—1～14, 「小五教育技術」15—1～14「小六教育技術」14—1～14「教育技術中等教育」6—1～12「教育技術学習心理」2—1～12  
 上智大学 「SOPHIA」10—1～14  
 昭和女子大学光葉会 「学苑」254～266  
 初等教育研究会 「教育研究」16—4～13, 17—1～3  
 信州大学教育学部 「紀要」10「研究論集」12  
 新文芸協会 「ECRIBISTO」6, 7  
 成城大学文芸学部 「成城文芸」25～28  
 聖心女子大学 「論叢」17  
 清泉女子大学 「紀要」8  
 全国広報研究会 「広報研究」90～100

全国大学国語教育学会 「国語科教育」 8  
 総理府統計局 「研究彙報」 11  
 大修館 「英語教育」 10—1～12, 11—1 「国語教室」 106～110  
 田唄研究会(広島大学文学部) 「田唄研究」 1  
 秩父市教育研究所 「教育研究」 17～19  
 千葉大学文理学部 「文化科学紀要」 3  
 中央大学文学部 「紀要」 10  
 電通 「広告論誌」 26  
 天理大学 「中文研究」 1, 2 「学報」 34～36 「ビブリア」 18～20 「日本文化」 40  
     「山辺道」 7, 8  
 東京外国語大学 「論集」 8 「語学研究所所報」 2  
 東京学芸大学 「研究報告」 12  
 東京教育研究所 「教室の窓」 10—2～12 「中学国語」 20～31  
 東京教育大学文学部 「紀要」 32, 36  
 東京女子大学比較文化研究所 「紀要」 11, 12 「比較文化」 8  
 東京大学教育学部 「紀要」 5  
 東京大学教養学部 「人文科学科紀要」 26  
 東京大学新聞研究所 「紀要」 9  
 東京天文台 「曆象年表」 1962  
 東京都立大学 「都大論究」 1  
 東京都立大学人文学部 「人文学報」 24～26  
 統計数理研究所 「彙報」 15, 16 「通信」 4  
 同志社女子大学 「学術研究年表」 12  
 同志社大学 「人文学」 51 「大学院年報」 2 「文化学年報」 4～6, 11  
 東北大学教育学部 「研究年報」 9  
 東北大学東北文化研究室 「紀要」 2, 3  
 東北大学文学部 「研究年報」 11  
 東北大学文学部「国語学研究」刊行会 「国語学研究」 1  
 東洋大学 「紀要」 14, 15 「教養部紀要」 1, 2  
 東洋大学国語国文学会 「文学論藻」 19～21  
 東洋文化研究所 「紀要」 22～24  
 徳島県教育委員会 「教育月報」 135～145  
 徳島県立教育研究所 「研究紀要」 12  
 徳島大学 「学芸紀要」 10  
 富山大学文理学部 「文学紀要」 10  
 都立杉並高等学校 「紀要」 2  
 中沢政雄 「国語教育科学」 1～13, 特集号

長崎大学芸学部 「人文科学研究報告」11  
 仲田庸幸 「国語研究」(愛媛国語研究会)37~39  
 名古屋大学 「教育学部紀要」7, 8 「国語国文学」8, 9 「文学部研究論集」25 「紀  
 要」(教養部)5  
 奈良学芸大学 「紀要」10-1  
 奈良女子大学文学会 「研究年報」4  
 南山学会 「アカデミア」28~31  
 日仏会館 「学報」1961  
 日本音声学会 「会報」107, 108  
 日本言語学会 「言語研究」40  
 日本国語教育学会 「会誌」14~19  
 日本コトバの会 「日本のコトバ」1, 8  
 日本文学研究会 「文学研究」16  
 日本文芸研究会(仙台市) 「文芸研究」37~39  
 日本放送文化研究所 「放送学研究」1 「文研月報」119~130  
 日本民俗学会 「会報」17~22  
 日本民族学協会 「民族学研究」25-1~4, 26-1 「民協通信」1  
 日本ローマ字会 「RÔMAZ I SEKAI」529~538  
 能楽思潮 「能楽思潮」17~19  
 野間教育研究所 「紀要」19, 20  
 函館人文学会 「人文論究」21  
 浜田教義 「土佐方言」1, 2  
 ヒグチタケン 「コトバ」7  
 一橋大学経済研究所 「経済研究」12-2~4  
 兵庫県立教育研修所 「研究報告集」71  
 平岡伴一 「炬火」26, 27  
 広島近世文芸研究会 「近世文芸稿」5  
 広島大学光葉会 「国語教育研究」3  
 広島大学国語国文学会 「国文学叢」25, 26  
 広島大学文学部 「紀要」19~21  
 広島中世文芸研究会 「中世文芸」22, 23  
 福井大学学芸学部 「紀要」10  
 福岡女子大学 「文芸と思想」11, 13, 15, 17, 19, 21~23  
 福島大学学芸学部 「論集」7~12  
 藤原与一(広島市) 「方言研究年報」1961  
 仏教大学 「研究紀要」39~41  
 文化放送 「ラジオコマーシャル」5

- 平安文学研究会（京都市） 「平安文学研究」26, 27  
 米国大使館文化交換局 「アメリカーナ」7-4~12, 8-1, 2  
 北海道学芸大学 「紀要」11「学術文献収報」19~22  
 北海道教育研究所 「研究紀要」34, 35  
 北海道大学国文学会 「国語・国文研究」18~20  
 徳波出版社 「実践国語教育」249~262  
 萬葉学会（吹田市） 「萬葉」39~42  
 三重県立大学 「研究年報」4-1  
 未定稿の会 「未定稿」9  
 宮城学院女子大学 「研究論文集」18  
 宮城県教育研究所 「研究紀要」昭和35年度  
 武庫川女子大学 「紀要」8  
 明治図書出版KK 「教育科学国語教育」1~17, 28~38  
 文部省 「教育統計」70~74「指定統計」9, 13, 15, 83「初等教育資料」132~143  
     「中等教育資料」116~129「へき地教育」7「文部統計速報」94「文部省年報」87  
 山形県教育研究所 「山形教育」85~90  
 山形県方言研究会 「山形方言」1~3, 5~6  
 山形大学 「紀要」（人文科学）4-4「紀要」（社会科学）1-2  
 山形大学国語国文学研究会 「国語研究」13  
 山口女子短期大学 「研究報告」14  
 山口大学 「文学会誌」12-1~2  
 山口大学教育学部 「研究論叢」9-1~3, 10-1~3, 11-1~3, 特別号  
 立命館大学人文学会 「立命館文学」187~197  
 立命館大学日本文学会 「論究日本文学」14~16  
 龍谷大学 「論集」365~367「国文学論叢」8  
 ローマ字教育会 「ことばの教育」131~133  
 早稲田大学 「国文学研究」24「学術研究」9「史観」61「早稲田演劇」7  
 CENTER FOR APPLIED LINGUISTICS "THE LINGUISTIC REPORTER" VOL. NO. 1~5, VOL. 2. NO. 1~6, VOL. 3. NO. 1~4  
 CM合同研究会 「A, C, C」10  
 UNIVERSITY OF CALIFORNIA "PUBLICATIONS IN LINGUISTICS" VOL. 19~20  
 UNIVERSITY OF LONDON "BULLETIN OF THE SCHOOL OF ORIENTAL AND AFRICAN STUDIES" VOL. 24. NO. 1~3

UNIVERSITY OF WASHINGTON "MODERN LANGUAGE  
QUARTERLY" VOL. 21. NO. 4, VOL. 22. NO. 1  
~4

# 庶務報告

## A. 庁舎および経費

### 1. 庁舎

所在 東京都千代田区神田一ツ橋1の1

木造モルタル塗, 2階建 建坪 本館 1,061,64m<sup>2</sup>

軽量不燃書庫 100,65m<sup>2</sup> 閲覧室 46,15m<sup>2</sup> 計 1,208,44m<sup>2</sup>

### 2. 経費

昭和36年度予算 総額 4,430万6,000円

人件費 3,541万8,000円

事業費 888万8,000円

昭和36年度科学研究費交付金(各個研究) 12万0,000円

〃 官庁営繕費 500万0,000円

〃 各所修繕費 69万0,000円

## B. 評議員会

会長○久松潜<sup>(37. 1. 16)</sup><sub>(会長就任)</sub> 副会長 有光 次郎<sup>(37. 1. 16)</sup><sub>(副会長就任)</sub>

阿部真之助 ○阿部 吉雄 ○石井 良助

伊藤忠兵衛 ○桂 寿一 桑原 武夫

○高津 春繁 ○佐々木八郎 ○沢田 慶輔

沢登 哲一 ○坪井 忠二 時枝 誠記

中島 健蔵 ※中島 文雄 ※西尾 実

○西脇順三郎 松方 三郎 山本 勇造

土岐 善磨 (36. 10. 31辞任)

○印は36. 12. 15就任を示す。※は36. 12. 15再任を示す。

### C. 組織と職員

1. 定員 教官 33 事務官 14 その他 20 計 67

#### 2. 組織および職員

	職名	氏名	備考
国立国語研究所 第1研究部 話しことば研究室	所長	岩瀬悦太郎	
	部長	林 大	
	室長	大石初太郎	
		宮地 裕	
		南 不二男	36.4.1 採用
		鈴木 重幸	
		泉 喜与子	
		吉村 香苗	
		見坊 豪紀	
		齋賀 秀夫	36.12.1 第3資料研究室長に昇任
書きことば研究室	室長	水谷 静夫	
		石綿 敏雄	
		宮島 達夫	
		橋本 圭子	
		高木 翠	
		鈴木百合子	
		小林さち子	
		植田 房子	36.5.1 採用 37.3.31 辞職
		柴田 武	
		野元 菊雄	
地方言語研究室	室長	上村 幸雄	
		徳川 宗賢	
		白沢 宏枝	
		輿水 実	
		芦沢 節	
		村石 昭三	
		吉沢 典男	
		根本今朝男	
		川又瑠璃子	
		永野 賢	
第2研究部 国語教育研究室	部長	高橋 太郎	
	室長	渡辺 友左	
		宮地美保子	
言語効果研究室	室長		

第3研究部 近代語研究室	部長 室長	山田 巖 林 四郎 進藤 咲子 宮島 秋子 中曾根 仁	旧性石田
古代語研究室開設 準備室	主任	山田 巖	
第4研究部 第1資料研究室	部長(併) 室長	広浜 文雄 岩渕悦太郎 松尾 拾	36.8.1 主任研究官を命ずる 36.9.20 第3資料研究室長 事務取扱を命ずる 36.12.1 第3資料研究室長 事務取扱を免ずる
第2資料研究室	室長	西尾 寅弥 田中 章夫 露峰 裕子 池田 稔子 飯豊 毅一 大久保 愛	36.7.1 採用 37.3.31 辞職 37.2.1 第3資料研究室から 配置換
第3資料研究室	室長 "	高田 正治 長沢ハルミ 小山 孝子 村尾 力 斎賀 秀夫 大久保 愛 松本 昭 小山 孝子	37.2.1 第3資料研究室から 配置換 36.9.20 死亡退職 36.12.1 第3資料研究室長 に昇任 37.2.1 第2資料研究室に配 置換 37.2.1 採用 37.2.1 第2資料研究室に配 置換
庶務部 庶務課	部長 課長 課長補佐	尾崎源之助 三島 良兼 名古屋恒太郎 鈴木 薫二 芳賀清一郎 増山 治子 根岸佐代子	
会計課	課長 課長補佐	出牛清次郎 伊藤 伸二 三浦 清伍 渋谷 正則	



図書室	室長(併)	西山 博	
		鈴木 亨	36.7.1 文部事務官に任官
		岡本 まち	37.1.1 文部事務官に任官
		江頭 健一	
		吉田芳太郎	
		金田 とよ	
		加藤 雅子	
		永井 時雄	36.7.10 辞職
		安藤信太郎	36.9.1 採用
		大石初太郎	
		鈴木篁二(併)	
芳賀清一郎(併)			
大塚 通子	37.1.1 文部事務官に任官		

#### D. 内地留学生受け入れ

全国都道府県から内地留学生を受け入れて、研究の便をはかっている。

次にその氏名研究題目などを掲げる。

氏名	学 校	研究題目	
秋池敏明	埼玉県鴻巣市立鴻巣 中学校教諭	言語理論と国語教育	昭和36. 4. 1 から " 37. 3. 31 まで
植渕政美	徳島県阿南市加茂谷 中学校教諭	文章構造をふまえて の読解指導	昭和36. 7. 1 から " 36.12.31 まで
大石逸策	千葉県千葉市聖書学 園高等学校教諭	助詞・助動詞の発音 的機能の研究	昭和36. 7. 1 から " 37. 3. 31 まで
上 敵 勝	鹿児島県川内市立平 佐西小学校教諭	南九州方言の研究	昭和37. 2.15 から " 37. 3. 2 まで

#### E. 日 誌 抄

1961. 5. 1	各省直轄研究所長連絡協議会総会 (農林省蚕糸試験場で)
5. 28	国立国語研究所講演会
	ところ 札幌市 自治会館
1.	ことばの混乱 国立国語研究所第1研究部長 林 大
2.	国語問題と国語教育 国立国語研究所長 岩淵悦太郎

3. 北海道における言語生活

(シンポジウム)

国立国語研究所地方言語研究室長 柴田 武  
北海道大学助教授 五十嵐三郎  
札幌北高等学校教諭 石垣 福雄  
北海道学芸大学教授 佐藤 誠  
北海道学芸大学助教授 長谷川清喜

共 催 北海道新聞社  
後 援 北海道教育委員会  
北海道大学  
北海道学芸大学

5. 29～30 第20回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議  
(日本学術会議で)
5. 30 文部省所轄研究所長会議(統計数理研究所で)
6. 9～10 第12回文部省所轄機関事務協議会(熱海で)
6. 12～13 関東管区行政監察局監察官の調査  
諸永第1部長, 伊藤課長, 生田副監察官, 松岡事務官
6. 23 東京国立文化財研究所浦山政雄外3名研究所見学  
" 立教大学助教授宇野義方外11名研究所見学
7. 3 愛知県常滑中学校教諭坂元登研究所見学
7. 6 文部省所轄研究所長会議(教育研究所で)
7. 15 韓国大邱市青丘大学助教授金宅圭研究所見学
7. 19 大蔵省山下管財局長, 野上課長補佐研究所視察
9. 1 文部省所轄研究所長会議(国立教育研究所で)
10. 4 各省直轄研究所長連絡協議会総会(東京工業試験所で)
10. 19～20 第14回文部省所管研究所事務協議会(大阪大学微生物研究  
所で)
11. 2 長野工業高等学校教諭北沢国男研究所見学
11. 9～10 文部省所管研究所長会議第3部会(箱根で)
11. 22 永年勤続者表彰式  
受賞者 庶務部長 尾崎源之助 庶務課長 三島良兼
12. 20 国立国語研究所創立記念日

1962. 1. 16 第47回国立国語研究所評議員会  
議事
- 1 会長・副会長の選出
  - 2 その他
2. 15～ 第12回文部省所管人文系（第3部）研究所事務協議会（福岡で）
3. 22 第48回国立国語研究所評議員会  
議事
1. 研究事業の報告
  2. その他
3. 31 庁舎移転
- 移転先 東京都北区稲付西山町  
(旧陸軍兵器補給廠跡)

昭和 37 年 10 月

国立国語研究所

東京都北区稲付西山町  
電話東京(901) 8154(代表)

UDC 058:495.6  
NDC 810.5

977

## 国立国語研究所刊行書

### 国立国語研究所年報

1~12 (昭和24年度～昭和35年度)

### 国立国語研究所報告

- 1 八丈島の言語調査
- 2 言語生活の実態 (秀英出版刊)  
—白河市および付近の農村における—  
¥300.00
- 3 現代語の助詞・助動詞  
—用法と実例—
- 4 婦人雑誌の用語  
—現代語の語彙調査—
- 5 地域社会の言語生活 (秀英出版刊)  
—鶴岡における実態調査—  
¥600.00
- 6 少年と新聞  
—小学生・中学生の新聞への接近と理解—
- 7 入門期の言語能力
- 8 談話語の実態
- 9 読みの実験的研究  
—音読にあらわれた読みあやまりの分析—
- 10 低学年の読み書き能力
- 11 敬語と敬語意識
- 12 総合雑誌の用語 (前編)  
—現代語の語彙調査—
- 13 総合雑誌の用語 (後編)  
—現代語の語彙調査—
- 14 中学年の読み書き能力
- 15 明治初期の新聞の用語
- 16 日本方言の記述的研究 (明治書院刊)  
¥900.00
- 17 高学年の読み書き能力
- 18 話しことばの文型(1)  
—対話資料による研究—
- 19 総合雑誌の用字
- 20 同音語の研究
- 21 現代雑誌九十種の用語用字  
—総記および語彙表—

### 国立国語研究所資料集

- 1 国語関係刊行書目(昭和17~24年)
- 2 語彙調査  
—現代新聞用語の一例—
- 3 送り仮名法資料集
- 4 明治以降国語学関係刊行書目 (秀英出版刊)  
¥300.00

国立国語研究所論集

1 こ と ば の 研 究  
国 語 年 鑑

(昭和 29 年 版) (秀英出版刊)  
¥450.00)

(昭和 30 年 版) (秀英出版刊)  
¥600.00)

(昭和 31 年 版) (秀英出版刊)  
¥450.00)

(昭和 32 年 版) (秀英出版刊)  
¥480.00)

(昭和 33 年 版) (秀英出版刊)  
¥480.00)

(昭和 34 年 版) (秀英出版刊)  
¥500.00)

(昭和 35 年 版) (秀英出版刊)  
¥550.00)

(昭和 36 年 版) (秀英出版刊)  
¥800.00)

(昭和 37 年 版) (秀英出版刊)  
¥950.00)

---

高 校 生 と 新 聞 国立国語研究所 共著 (秀英出版刊)  
日本新聞協会 ¥280.00)

青年とマス・コミュニケーション 日本新聞協会 共著 (金沢書店刊)  
国立国語研究所 ¥280.00)

1961—1962

ANNUAL REPORT OF NATIONAL  
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Researches from April 1961 to March 1962

Research in the Sentence Patterns of Colloquial Japanese

Research on the Use of Characters and Vocabulary in  
Magazines

Survey for the Linguistic Atlas of Japan

Study of the Language Development of School Children

Study of the Typographic Conditions Necessary for Writing  
laterally of Japanese Sentences

Study on the Japanese Language of the Meizi Period

Making of Each Index of Some Dictionaries Before the  
Edo Period

Research in Special Problems

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

INATUKE-NISIYAMA, KITA, TOKYO